

令和6年度

大学院経営情報イノベーション研究科
講義概要（博士後期課程）



静岡県立大学

UNIVERSITY OF SHIZUOKA

教 育 課 程 等 の 概 要

(経営情報イノベーション研究科 博士後期課程)

科目区分	授業科目の名称	配当年次	開講期	単位数			授業形態		
				必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習
特殊講義	イノベーション論特殊講義	1・2	前		1		○		
	経営事業創造特殊講義	1・2	後		1		○		
	ソーシャル・イノベーション特殊講義	1・2	前		1		○		
	地域マネジメント特殊講義	1・2	後		1		○		
	知的情報システム特殊講義	1・2	前		1		○		
	知的情報基盤特殊講義	1・2	後		1		○		
	小計 (6科目)				0	6	0		
演習	特殊演習 I	1・2	前	2				○	
	特殊演習 II	1・2	前		2			○	
	小計 (2科目)			2	2	0			
研究指導	研究指導 I	1	通	4				○	
	研究指導 II	2	通	4				○	
	研究指導 III	3	通	4				○	
	小計 (3科目)	—		12	0	0		—	
合計 (11科目)		—		14	8	0		—	
学位又は称号	博士 (学術) 博士 (経営情報学)		学位又は学科の分野			経済学関係			
卒業要件及び履修方法						授業期間等			
(修了要件) 本課程に3年以上在籍し、18単位以上習得し、かつ必要な研究指導を受けた上、博士論文の審査及び最終試験に合格すること。 (履修方法) 必修科目14単位を含め、18単位以上を履修する。ただし、研究指導Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ及び特殊演習Ⅰは必修とし、特殊講義及び特殊演習Ⅱは選択科目とする。選択科目は4単位以上の履修を必要とする。						1学年の学期区分		2学期	
						1学期の授業期間		15週	
						1時限の授業時間		90分	

【科目名】	イノベーション論特殊講義	Innovation Management
【開講時期】	2024 年度前期	
【科目責任者】	竹下城二郎 国保祥子	
【担当教員】	竹下城二郎 国保祥子	
【授業の目的・方法】	本講義では、イノベーションに関わる理論、種類、機能、その創出の仕組み、あるいは企業経営とのかかわりについて講じる。イノベーションとは、単に技術革新を指すものではなく、広く社会・経済を革新していくものである。そのダイナミズムをこれまでの経済学、経営学、あるいは社会学などに裏打ちされた知見を通じて、広範囲な視点から俯瞰し、イノベーションをいかに生み出していくかを考察する。	
【到達目標】	本講義では、イノベーションに関わる理論、種類、機能、その創出の仕組み、あるいは企業経営とのかかわりについて講じる。イノベーションとは、単に技術革新を指すものではなく、広く社会・経済を革新していくものである。そのダイナミズムをこれまでの経済学、経営学、あるいは社会学などに裏打ちされた知見を通じて、広範囲な視点から俯瞰し、イノベーションをいかに生み出していくかを考察する。	
【準備学習】	事前に配られた参考文献・資料に目を通しておくこと	
【授業展開】	<p>第1回:イノベーションの理論 イノベーションに関する基礎理論を広範囲に紹介・解説する。</p> <p>第2回:イノベーションの種類 イノベーションの内容を詳細に検討する。</p> <p>第3回:イノベーションと経営(奥村) イノベーションがビジネスやソーシャルな分野でどの様に生み出され、活用されるかを検討する。</p> <p>第4回:新規事業創造のロジック 新規事業創造にかかわる理論およびその成功に至るロジックを検討する。今日のベンチャー企業や既存企業による事業転換、あるいは多角化による新規事業創造の事例を検討する。</p> <p>第5回:イノベーションと企業家精神 イノベーションの担い手である企業家の特性を明らかにする。</p> <p>第6回:イノベーションとネットワーク イノベーションの発生メカニズムをネットワークの観点から検討する。</p> <p>第7回:イノベーションと産業クラスター イノベーションと各地域における産業集積との関係性を検討する。</p> <p>第8回:イノベーション・ディレンマ イノベーションを生み出す組織特性を多角的に検討する。</p> <p>※授業の中で最新のシラバスを提示します</p>	
【評価方法】	授業での発言及び課題レポートの内容で評価する。	
【テキスト】	テキストについては、未定。 参考文献・資料は適時配布する。	
【参考書】	参考文献・資料は適時配布する。	
【備考】		
【社会人聴講生】	受け入れない。	【科目等履修生】 受け入れない。

【科目名】	経営事業創造特殊講義	Business Creation	
【開講時期】	2024 年度後期		
【科目責任者】	岩崎邦彦		
【担当教員】	岩崎邦彦 落合康裕		
【授業の目的・方法】	本講義は、事業創造と市場創造に関する理論と方法論に精通するとともに、その実践に不可欠な応用的能力を習得することを目標とする。具体的には、起業や新規事業開発などの事業創造分野と、新製品開発や新市場開拓などの市場創造分野に焦点をあて、これらの課題に理論的側面と実践的側面の両面からアプローチしていく。 なお、遠隔授業(Zoom による同時双方向型)を適宜取り入れて講義を行う。		
【到達目標】	市場創造、事業創造、イノベーションに関する専門的な知識と実践的な応用力を備えた高度専門人材の育成を目標とする。		
【準備学習】	事業創造、市場創造、起業、イノベーション、マーケティング等に関するジャーナルや文献を活用し、自らが研究対象とする分野の研究動向を、常にアップデートすること。		
【授業展開】	<p>(岩崎邦彦 前半担当)市場創造に関する理論と研究方法論、実践活動について考察を行う。具体的な内容としては、市場創造の理論、市場分析の方法、企業分野・観光分野・農業分野の新市場開拓の理論と実践事例などを取り上げ、講義とクラス討議を行う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・市場創造の理論 ・企業のイノベーションと顧客創造 ・観光のイノベーションと顧客創造 ・農業のイノベーションと顧客創造 <p>(落合康裕 後半担当)事業創造に関する理論と研究方法論、実践活動について考察を行う。具体的な内容としては、新規事業創造の理論と方法、起業のプロセスとそのマネジメント、既存企業の新規事業、起業家支援の施設と政策などを取り上げ、講義とクラス討議を行う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・新規事業創造の理論と方法 ・起業のプロセスとそのマネジメント ・既存企業の新規事業 ・起業家支援の施設と政策 		
【評価方法】	各回のプレゼンテーション内容、講義への取組、課題レポートの内容を評価。 総合的な評価をスコア化し、本研究科・採点評価基準に沿って成績評価。		
【テキスト】	岩崎邦彦『引き算する勇気：会社を強くする逆転発想』日本経済新聞出版 岩崎邦彦『地域引力を生み出す観光ブランドの教科書』日本経済新聞出版 岩崎邦彦『農業のマーケティング教科書』日本経済新聞出版 落合康裕『事業承継の経営学：企業はいかに後継者を育成するか』白桃書房 落合康裕『事業承継のジレンマ：後継者の制約と自律のマネジメント』白桃書房		
【参考書】	岩崎邦彦『世界で勝つブランドをつくる』日本経済新聞出版 岩崎邦彦『小さな会社を強くするブランドづくりの教科書』日本経済新聞出版 後藤俊夫(監修)落合康裕(企画編集)『ファミリービジネス白書 2022 年度版：未曾有の環境変化と危機突破力』白桃書房		
【備考】			
【社会人聴講生】	受入不可(博士後期糧の演習科目のため)	【科目等履修生】	

【科目名】	ソーシャル・イノベーション特殊講義	Social Innovation
【開講時期】	2024 年度前期	
【科目責任者】	東野定律	
【担当教員】	藤本健太郎、東野定律、木村 綾	
【授業の目的・方法】	<p>グローバル化、情報化の進展、少子・高齢化、非婚化、人間関係の希薄化といった背景の中で、失業率の増大、格差の拡大、社会から孤立した人の増大といった社会的課題が蓄積している。このような課題を解決するためには、地域から社会を変革するソーシャル・イノベーションとその担い手の育成が緊急の課題となっている。</p> <p>本講義では、特に社会保障政策の視点からソーシャル・イノベーションについて解説し、ソーシャル・インクルージョン(社会的包摂)、公民協働論、社会福祉論、医療介護制度論から地域包括ケアシステムなど具体的な政策のあり方にまで踏み込んだ議論を行うものとする。</p> <p>本講義は3人の講師が互いに内容に関して連携しつつ各自の専門分野を受け持つこととする。本講義における責任は担当の教授が受け持つこととする。</p>	
【到達目標】	社会保障政策の視点からソーシャル・イノベーション、保健・医療・福祉の分野におけるマネジメントなど博士論文作成に必要な知識を習得する。	
【準備学習】	事前学習として教員の提示したテーマについて、関連資料、書籍等を読んでおくこと。事後学習として講義中に提供した課題内容について、内容の理解を深めること。	
【授業展開】	<p>第1回: ソーシャル・インクルージョンの概念(藤本) ソーシャル・インクルージョンに関する基礎理論を広範囲に紹介・解説する。</p> <p>第2回: ソーシャル・インクルージョンとイノベーション(藤本) ソーシャル・インクルージョンのイノベーション的側面について検討する。</p> <p>第3回: ソーシャル・インクルージョンと社会保障(藤本) ソーシャル・インクルージョンと社会保障の関係性について検討する。</p> <p>第4回: 医療・介護政策の仕組みと今後の展望(東野) 医療・介護政策の仕組みに関する基礎理論を広範囲に紹介・解説する。</p> <p>第5回: 医療介護サービスの質の評価とイノベーション(東野) 医療介護サービスの質とソーシャル・イノベーションの効果について検討する。</p> <p>第6回: 地域包括ケアシステムと保健医療福祉職における連携(東野) 地域包括ケアシステムと保健医療福祉職における連携の必要性について検討する。</p> <p>第7回: 地域福祉政策と福祉マネジメント(木村) 地域における重要課題となっている地域福祉政策を把握し、地域における福祉イノベーションの必要性を明らかにする。</p> <p>第8回: 福祉サービスとその評価(木村) 現在提供されている福祉サービスの提供体制、現場の状況から課題の抽出を行い、政策評価を行う。</p>	
【評価方法】	各担当教員ごとに提出されたレポートの内容をそれぞれ評価し(各 100 点)、それを平均化し、最終的な評価点とする。	
【テキスト】	別途指示する	
【参考書】		
【備考】		
【社会人聴講生】		【科目等履修生】

【科目名】	地域マネジメント特殊講義	Regional Management
【開講時期】	2024 年度後期	
【科目責任者】	岸昭雄	
【担当教員】	小西敦、岸昭雄、松岡清志	
【授業の目的・方法】	<p>これからの地域は、地方分権が進む一方で、経済社会のグローバル化、少子・高齢化、地域間格差の拡大といった厳しい環境変化に直面しており、地域自らが地域をマネジメント(経営)して、変化に適応していくことを迫られている。具体的には、地域がビジョンに基づき、地域の資源を活用しながら、様々なステークホルダー(関係主体=住民(家計)、事業者(企業)、行政(自治体)等)の協働によって地域の発展を図ることが必要である。このため本講義では、地域マネジメントに関して、組織運営、ビジョン作成、制度設計などの観点から、近年の潮流を踏まえて議論する。本講義は 4 人の講師が互いに内容に関して連携しつつ各自の専門分野を受け持つこととする。本講義における責任は担当の教授のうち 1 名が受け持つこととする。</p>	
【到達目標】	地域マネジメントに必要な地域経済学、行政学、消費者論、公民協働論、社会福祉論などの知見を把握する。	
【準備学習】	事前学習として教員の提示したテーマについて、関連資料、書籍等を読んでおくこと。事後学習として講義中に提供した資料内容の理解を深めること。	
【授業展開】	<p>第1回:政策評価制度の現状・課題と今後の方向性(小西) 制度導入から 20 年を超えた政策評価制度について、現状と課題を踏まえた上で、法的根拠を含め今後の方向性を議論する。</p> <p>第2回:地方自治制度に関する地方制度調査会における検討状況と今後の方向性(小西) DX の進展及び COVID-19 対応で直面した課題等を踏まえ、地方制度のあり方について議論する。</p> <p>第3回:デジタル技術による地域課題の解決(松岡) AI、IoT、RPA などをはじめとするデジタル技術が社会課題の解決および行政の内部業務改革にどのように貢献し得るかを、事例を交えて解説する。</p> <p>第4回:多様な形態による官民協働(松岡) 官民協働による社会課題解決をめぐる新たなアプローチとしてのデザイン思考、および具体的手法としてのオープンイノベーションを中心に、デジタル時代の官民協働のあり方について解説する。</p> <p>第5回:人口減少社会における都市政策の方向性(岸) 人口減少社会において必要とされる、多様な主体の参画による都市政策の方向性について解説する。</p> <p>第6回:産学官民連携のエリアマネジメント(岸) 人口減少社会における都市政策の方向性について、産学官民連携のエリアマネジメントの実例を通じて、地域が主体となったまちづくりのあり方を議論する。</p>	
【評価方法】	各担当教員ごとに提出されたレポートの内容をそれぞれ評価し(各 100 点)、それを平均化し、最終的な評価点とする。	
【テキスト】	村松岐夫編著『公務改革の突破口』東洋経済新報社、宮脇洵『公共経営論』PHP研究所、経済協力開発機構編著『世界の行政改革』明石書店	
【参考書】	特に無し	
【備考】	発言機会を多くするなど積極的な授業への参加が求められる。	
【社会人聴講生】	不可	【科目等履修生】 不可

【科目名】	知的情報システム特殊講義	Intelligent Information Systems
【開講時期】	2024 年度前期	
【科目責任者】	湯瀬 裕昭	
【担当教員】	湯瀬 裕昭、渡邊 貴之	
【授業の目的・方法】	<p>①インターネット上や各種センサを介したデータ・メディア・空間データが爆発的に増加していることに伴い、実問題に対する大規模かつ複雑なデータの知的情報処理が必要とされる時代が到来していることと、②そのような知的情報処理を具体化した知的情報システムは社会・ビジネスのイノベーションの基盤として活用することも要請されていることを踏まえ、知的情報システムの構築・利用に関して、(1)実問題に対する知的情報処理理論の展開と応用、(2)知的情報システムの事例、を講義する。</p> <p>本講義は 2 人の講師が互いに内容に関して連携しつつ各自の専門分野を受け持つこととする。本講義における責任は担当の教授のうち1名が受け持つこととする。</p>	
【到達目標】	知的情報システムの構築・利用に関する基礎的な事項や知的情報システムの事例を理解し、それらを応用して社会のイノベーションにつなげるための基礎的な素養を習得する。さらに、様々な分野への知的情報システムの応用の可能性について考えを深められるようになる。	
【準備学習】	授業前に講義資料等に目を通し理解しておくこと。授業後に講義内容を復習し、十分に理解を定着させること。	
【授業展開】	<p>第1回：総論として、技術開発を社会のイノベーションにつなげるための基本的な方法論、イノベーターとして求められる姿について講義する。</p> <p>第2回：人間の知覚特性を理解し、人間の犯しやすいエラーの特性とその事例に関する知識を踏まえて、使い勝手に優れ、事故や失敗を未然に防ぐユーザインタフェースおよびシステムを設計する技術を講義する。</p> <p>第3回：音声・文字・画像・図形などの情報の意味にまで踏み込んで理解・活用する技術の理論と応用を講義する。</p> <p>第4回：知的情報システムの構築を目標として「概念モデリング」の一般的な理論・方法を講義する。</p> <p>第5回：事例をもとに Project/Problem-Based Learning(PBL)や e-learning へ概念モデリングの導入を扱う。</p> <p>第6回：学習者の抽象概念形成や学習対象の体系的認識を目的とした UML(Unified Modeling Language)等のモデル表現の方法について議論する。</p> <p>第7回：データベース技術、情報検索技術、地図データ処理技術を中心とするデータ工学技術の理論と方法を講義する。</p> <p>第8回：データベース技術、情報検索技術、地図データ処理技術を中心とするデータ工学技術の応用事例を講義する。</p>	
【評価方法】	各担当教員ごとに提出されたレポートの内容をそれぞれ評価し(各 100 点)、それを平均化し、最終的な評価点とする。	
【テキスト】	適宜教員が資料を配布する。	
【参考書】	<p>[松浦分]イノベーションを起こす(伊丹敬之(著)、日本経済新聞出版社)、エモーショナル・デザイン(ドナルド・A・ノーマン(著)、新曜社)、音声言語処理の潮流(白井克彦(編著)、松浦博ほか(著)、コロナ社)</p> <p>[鈴木分]UML モデリングの本質(日経 IT プロフェッショナル BOOKS)(児玉 公信(著)、日経 BP 社)</p> <p>[池田分]テキストマイニングハンドブック(ローレン・フェルドマン(著)、東京電機大学出版局)、GIS の理論(村山 祐司 編集、朝倉書店)</p>	
【備考】	特に無し	
【社会人聴講生】	受入不可	【科目等履修生】 受入不可

【科目名】	知的情報基盤特殊講義	Mathematical Foundation for Intelligent Systems	
【開講時期】	2024 年度後期		
【科目責任者】	武藤伸明		
【担当教員】	武藤伸明、六井淳		
【授業の目的・方法】	①社会・産業・ビジネスのグローバル化・情報化に伴い、大規模かつ複雑な問題を適切にモデル化し数理的に分析する技術が求められていることと、②そのような技術をコアとする知的情報システムは社会・産業・ビジネスにおけるイノベーションの基盤として活用することも要請されていることも踏まえ、知的情報システムの構築・利用に関して、(1) 大規模かつ複雑な問題のモデル化に関する理論と方法、(2) 知的情報システム構築のための数理的処理の理論と方法、を講義する。		
【到達目標】	知的情報システムの構築・利用に関しての高度な理論と技術を身につける。		
【準備学習】	予習として、担当教員の指示に従って事前に講義内容を理解しておくこと。 復習として、講義の内容を振り返り理解を深めること。		
【授業展開】	<p>第1回：総論、および複雑な社会的ネットワーク現象を解明する手法としてのグラフ理論について講義する。</p> <p>第2回：大規模複雑なネットワークデータの知的処理の理論と方法 ①クチコミ 宣伝効果の最大化などを行うための社会ネットワーク上での情報拡散の数理モデルについて講義する。</p> <p>第3回：大規模複雑なネットワークデータの知的処理の理論と方法 ②イノベーション波及の将来予測などを行うための社会ネットワーク上での意見形成の数理モデルについて講義する。</p> <p>第4回：大規模複雑なネットワークデータの知的処理の理論と方法 ③コンピュータ上でのこれらモデルの高効率なシミュレーションを実現するための理論、方法、システム化について講義する。</p> <p>第5回：効率的なデータ解析を行うための基礎となる組合せ論について、それらの数理的処理の理論と方法を講義する。</p> <p>第6回：コンピュータシミュレーションや社会データの分析に必須である大規模データのコンピュータによる処理技術 ①コンピュータシミュレーションなどの基盤技術である線形代数問題における大規模データ処理について講義する。</p> <p>第7回：コンピュータシミュレーションや社会データの分析に必須である大規模データのコンピュータによる処理技術 ②社会データに基づく情報抽出などの基盤となる大規模最適化問題について講義する。</p> <p>第8回：コンピュータシミュレーションや社会データの分析に必須である大規模データのコンピュータによる処理技術 ③それら理論のコンピュータ上での具体的実装について講義する。</p>		
【評価方法】	講義への取り組み (40%) およびレポート (60%) により評価する。		
【テキスト】	授業開始時に教員が適宜指示する。		
【参考書】	授業開始時に教員が適宜指示する。		
【備考】			
【社会人聴講生】	不可	【科目等履修生】	不可

【科目名】	特殊演習 I	Special Seminar I
【開講時期】	2024 年度前期	
【科目責任者】	湯瀬 裕昭	
【担当教員】	湯瀬 裕昭	
【授業の目的・方法】	<p>本演習は、博士論文作成にとって必要なスキルの習得を目指す。そのため、情報システムの中でも特に応用的な意味合いが強い、教育分野、福祉分野などで活用されている情報システムに焦点を当て、それらの情報システムの技術開発や効果的な活用のために必要となる技術や理論等に関して、関連文献の講読、学術論文を含む技術文書の作成演習、プレゼンテーションの演習を行なう。</p> <p>本演習では、履修生に内容を理解していることを確認するための発表を、教員による説明の回以外では毎回課す。</p>	
【到達目標】	博士論文作成にとって必要な情報システム関連のスキルを習得する。	
【準備学習】	授業前に講義資料等に目を通し理解しておくこと。授業後に講義内容を復習し、十分に理解を深めておくこと。	
【授業展開】	<p>第1回:教育・福祉分野等での情報技術活用の概観 教育・福祉分野等における情報技術活用を事例を示しながら俯瞰する。また、第2回から第9回までの各トピックについて講読文献を決定し、文献講読方法を説明する。</p> <p>第2回:情報教育の関連文献の講読 以下、第9回まで、初回に決定した各回のトピックに沿った講読文献について、特に査読論文については新規性、獨創性、有用性の理解に重点を置いて講読を行う。</p> <p>第3回:e-Learningの関連文献の講読</p> <p>第4回:遠隔教育システムの関連文献の講読(1)</p> <p>第5回:遠隔教育システムの関連文献の講読(2)</p> <p>第6回:福祉情報システム・支援工学の関連文献の講読(1)</p> <p>第7回:福祉情報システム・支援工学の関連文献の講読(2)</p> <p>第8回:福祉情報システム・支援工学の関連文献の講読(3)</p> <p>第9回:他分野(防災等)の情報システムの関連文献の講読</p> <p>第10回:技術文書作成技法 論文等を含む技術文書作成の重要事項を説明する。</p> <p>第11回:技術文書作成演習(1) 以下、第12回まで、履修生の現在の研究内容などを用いて技術文書作成演習を行う。</p> <p>第12回:技術文書作成演習(2)</p> <p>第13回:プレゼンテーション技法 プレゼンテーション資料作成と発表方法の重要事項を説明する。</p> <p>第14回:プレゼンテーション演習 履修生の現在の研究内容などを用いてプレゼンテーション演習を行う。</p> <p>第15回:まとめ これまでの演習を通して学んだことを統一的に整理し、各人の研究につなげることを意識づけさせる。</p>	
【評価方法】	授業回ごとの発表内容(60%)、最終レポートの内容(40%)	
【テキスト】	適宜教員が資料を配付あるいは指示する。	
【参考書】	Walter Dick, Lou Carey, James O. Carey: "The Systematic Design of Instruction," Allyn & Bacon 市川熹,手嶋教之:『福祉と情報技術』,オーム社	
【備考】	特になし	
【社会人聴講生】	受入不可	【科目等履修生】 受入不可

【科目名】	特殊演習 I	Special Seminar I
【開講時期】	2024 年度前期	
【科目責任者】	武藤 伸明	
【担当教員】	武藤 伸明	
【授業の目的・方法】	<p>本演習は博士論文作成にとって必要なスキルの習得を目指す。</p> <p>特にグラフ論、組合せ論、最適化問題や計算幾何学、線形代数問題の分野について、コンピュータで扱うためのアルゴリズムおよび実装の技法について、文献を選択し特有の技法を学び、研究、討論を行う。</p> <p>本演習では、受講生に内容を理解していることを確認するための発表を、実習の回以外では毎回課す。</p>	
【到達目標】	博士論文作成にとって必要なスキル、特にコンピュータによる高速処理技術を身につける。	
【準備学習】		
【授業展開】	<p>第1回：大規模データの計算、処理アルゴリズムの概要</p> <p>第2回：大規模データの計算、処理アルゴリズムの歴史的展開</p> <p>第3回：線形代数問題における大規模データ処理（文献購読）</p> <p>第4回：線形代数問題における大規模データ処理（文献購読、討論）</p> <p>第5回：線形代数問題における大規模データ処理（アルゴリズム研究）</p> <p>第6回：線形代数問題とスーパーコンピューティング</p> <p>第7回：最適化問題における大規模データ処理（文献購読）</p> <p>第8回：最適化問題における大規模データ処理（文献購読、討論）</p> <p>第9回：最適化問題における大規模データ処理（アルゴリズム研究）</p> <p>第10回：最適化問題における大規模データ処理（プログラム実装）</p> <p>第11回：計算幾何学問題における大規模データ処理（文献購読）</p> <p>第12回：計算幾何学問題における大規模データ処理（文献購読、討論）</p> <p>第13回：計算幾何学問題における大規模データ処理（アルゴリズム研究、プログラム実装）</p> <p>第14回：計算幾何学とコンピュータハードウェア</p> <p>第15回：総括</p>	
【評価方法】	授業回ごとの発表、実習内容（50%）、最終レポート（50%）	
【テキスト】	授業時に配布する。	
【参考書】	<p>Henri Cohen. A Course in Computational Algebraic Number Theory. Springer.</p> <p>William H. Press, et. Al. Numerical Recipes 3rd Edition: The Art of Scientific Computing. Cambridge University Press.</p>	
【備考】		
【社会人聴講生】	不可	【科目等履修生】 不可

【科目名】	特殊演習 I	Special Seminar I
【開講時期】	2024 年度前期	
【科目責任者】	渡邊 貴之	
【担当教員】	渡邊 貴之	
【授業の目的・方法】	<p>本演習は、博士論文作成にとって必要な理論やスキルの習得を目指す。そのため、情報通信産業分野を対象とした CAE 解析技術を高度化・高性能化するための最先端のシミュレーションプログラム構築技術について、ソフトウェア・ハードウェアの両面から演習を行う。クラスタ、マルチコア、メニーコア及び高速ネットワークを活用した並列分散シミュレーション技術について、関連論文の調査、プログラミング技術を学ぶ。</p> <p>本演習では、履修生に内容を理解していることを確認するための発表を、教員による説明の回以外では毎回課す。</p>	
【到達目標】		
【準備学習】		
【授業展開】	<p>第1回:教育・福祉分野等での情報技術活用の概観 教育・福祉分野等における情報技術活用を事例を示しながら俯瞰する。また、第2回から第9回までの各トピックについて講読文献を決定し、文献講読方法を説明する。</p> <p>第2回:情報教育の関連文献の講読 以下、第9回まで、初回に決定した各回のトピックに沿った講読文献について、特に査読論文については新規性、獨創性、有用性の理解に重点を置いて講読を行う。</p> <p>第3回:e-Learning の関連文献の講読</p> <p>第4回:遠隔教育システムの関連文献の講読(1)</p> <p>第5回:遠隔教育システムの関連文献の講読(2)</p> <p>第6回:福祉情報システム・支援工学の関連文献の講読(1)</p> <p>第7回:福祉情報システム・支援工学の関連文献の講読(2)</p> <p>第8回:福祉情報システム・支援工学の関連文献の講読(3)</p> <p>第9回:他分野(防災等)の情報システムの関連文献の講読</p> <p>第10回:技術文書作成技法 論文等を含む技術文書作成の重要事項を説明する。</p> <p>第11回:技術文書作成演習(1) 以下、第12回まで、履修生の現在の研究内容などを用いて技術文書作成演習を行う。</p> <p>第12回:技術文書作成演習(2)</p> <p>第13回:プレゼンテーション技法 プレゼンテーション資料作成と発表方法の重要事項を説明する。</p> <p>第14回:プレゼンテーション演習 履修生の現在の研究内容などを用いてプレゼンテーション演習を行う。</p> <p>第15回:まとめ これまでの演習を通して学んだことを統一的に整理し、各人の研究につなげることを意識づけさせる。</p>	
【評価方法】	授業回ごとの発表内容(60%)、最終レポートの内容(40%)	
【テキスト】	適宜教員が資料を配付あるいは指示する。	
【参考書】	Walter Dick, Lou Carey, James O. Carey: "The Systematic Design of Instruction," Allyn & Bacon 市川熹,手嶋教之:『福祉と情報技術』,オーム社	
【備考】	特になし	
【社会人聴講生】		【科目等履修生】

【科目名】	特殊演習 I	Special Seminar I
【開講時期】	2024 年度前期	
【科目責任者】	岩崎邦彦	
【担当教員】	岩崎邦彦	
【授業の目的・方法】	<p>本演習は博士論文作成にとって必要な研究方法論、理論、および、応用研究力の習得を目指す。</p> <p>具体的には、マーケティングの専門的な研究を行うための理論と研究方法論について理解するとともに、マーケティング研究で用いられる代表的な定性的リサーチ手法と定量的リサーチ手法の理解を深める。さらに、農産物、観光、中小企業などの分野において、地域が抱えるマーケティング課題を取り上げ、関連研究のレビューとクラス討議を行い、マーケティングに関する応用研究力、実践的応用力を習得する。</p> <p>本演習では、自ら考える姿勢を喚起することや、内容の理解確認ため、受講生によるプレゼンテーション、ディスカッションを各回で行う。</p>	
【到達目標】	マーケティングに関する深い知識と実践的な応用力を備えた専門的職業人の育成、および、マーケティングで地域に貢献できる人材の育成を目標とする。	
【準備学習】	マーケティングや関連分野に関するジャーナルや文献を活用し、自らが研究対象とする分野の研究動向を、常にアップデートすること。	
【授業展開】	<p>第1回:オリエンテーション</p> <p>第2回:マーケティング理論(1) セグメンテーションポジショニング等に関する理論</p> <p>第3回:マーケティング理論(2) 製品、プロモーション、価格戦略等に関する理論</p> <p>第4回:マーケティング研究の方法論(1) 非相互作用的・経済学的マーケティング研究、相互作用的・経済学的マーケティング研究</p> <p>第5回:マーケティング研究の方法論(2) 非相互作用的・非経済学的マーケティング研究、相互作用的・非経済学的マーケティング研究</p> <p>第6回:定性的マーケティングリサーチ(1) 定性的調査の本質とアプローチ</p> <p>第7回:定性的マーケティングリサーチ(2) フォーカスグループ、デプスインタビュー、定性データ分析</p> <p>第8回:定量的マーケティングリサーチ(1) 定量的調査の本質とアプローチ</p> <p>第9回:定量的マーケティングリサーチ(2) 調査票デザイン、サンプリング、定量データ分析</p> <p>第10回:地域マーケティングの理論と実践(1) 地域ブランドに関する応用マーケティング研究</p> <p>第11回:地域マーケティングの理論と実践(2) スモールビジネスに関する応用マーケティング研究</p> <p>第12回:地域マーケティングの理論と実践(3) 地域商業に関する応用マーケティング研究</p> <p>第13回:地域マーケティングの理論と実践(4) 観光・サービスに関する応用マーケティング研究</p> <p>第14回:地域マーケティングの理論と実践(5) 農産物に関する応用マーケティング研究</p> <p>第15回:まとめ</p>	
【評価方法】	各回のプレゼンテーション内容、講義への取組、課題レポートの内容を評価。 総合的な評価をスコア化し、本研究科・採点評価基準に沿って成績評価。	
【テキスト】	<p>・Kotler, Philip and Kevin Keller(2008), Marketing Management, International Edition, 13th edition.Prentice Hall College Division.</p> <p>・Malhotra,Naresh (2008), Marketing Research: An Applied Orientation,5th International edition, Pearson Education.</p> <p>・Journa</p>	
【参考書】	演習内容に応じて適宜紹介する	
【備考】	積極的な授業への参加、ディスカッション、プレゼンテーションが求められる	

【社会人聴講生】	「受入不可」(院生を対象とした特殊演習のため)	【科目等履修生】	「受入不可」(院生を対象とした特殊演習のため)
----------	-------------------------	----------	-------------------------

【科目名】	特殊演習 I	Special Seminar I
【開講時期】	2024 年度前期	
【科目責任者】	岸 昭雄	
【担当教員】	岸 昭雄	
【授業の目的・方法】	本演習は博士論文作成にとって必要な研究方法論および理論の習得を目指す。そのため、公共部門が政策を通じて社会に与えるインパクトについて、政策評価の観点から考察する。政策評価の基礎理論を踏まえた上で、実際の政策実施に当たって考慮すべき事柄について実践的に考察を行う。具体的には、政策立案の際の説明責任(アカウンタビリティ)、住民参加(パブリックコメント、パブリックインボルブメント)、財源問題(PPP、PFI)といった課題に対して、具体的な事例をもとに考察を行う。本演習では、履修生の理解促進のため定期的に発表を課し、ディスカッション方式で演習を進める。	
【到達目標】	受講生の博士論文研究テーマと照らし合わせ、有用な知識を身につけること	
【準備学習】	現代社会において政策の直面する課題について把握しておくこと	
【授業展開】	第1回:政策立案の考え方 第2回:政策評価の理論 1 第3回:政策評価の理論 2 第4回:政策評価の理論 3 第5回:公共部門の説明責任(アカウンタビリティ)1 第6回:公共部門の説明責任(アカウンタビリティ)2 第7回:政策立案における住民参加 1 第8回:政策立案における住民参加 2 第9回:政策立案における住民参加 3 第10回:政策の財源確保問題 1 第11回:政策の財源確保問題 2 第12回:政策の財源確保問題 3 第13回:政策評価の実例 1 第14回:政策評価の実例 2 第15回:まとめ	
【評価方法】	各回の発表、ディスカッション内容から総合的に評価する	
【テキスト】	講義の際に適宜指示する。	
【参考書】	講義の際に適宜指示する。	
【備考】	特になし	
【社会人聴講生】	不可	【科目等履修生】 不可

【科目名】	特殊演習 I	Special Seminar I
【開講時期】	2024 年度前期	
【科目責任者】	東野 定律	
【担当教員】	*東野 定律	
【授業の目的・方法】	<p>本演習は博士論文作成にとって必要な研究方法論および理論の習得を目指す。そこで介護保険制度および介護サービスにおけるイノベーションの理解に重要な介護保険制度における要介護認定の仕組み、および介護サービスにおける質の評価、介護分野における新たなサービス事業の展開に関する演習を行う。特に①地域の専門職の連携機能の測定と評価、②インフォーマルサポートである家族介護の負担感の評価を含めた在宅介護の課題に関する検討③地域包括ケア体制を構築する保険者である自治体機能の評価などを主題に、先行研究の把握と検討方法、概念および理論構築の仕方、データ構築手法、分析手法などの観点から、演習を行う。</p> <p>本演習では、履修生に内容を理解していることを確認するための発表を毎回課す。</p>	
【到達目標】	<ol style="list-style-type: none"> 1. 博士論文作成にとって必要な研究方法論および理論の習得 2. 特に介護保険制度および介護サービスにおけるイノベーションの理解に重要な介護保険制度における要介護認定の仕組み、および介護サービスにおける質の評価、介護分野における新たなサービス事業の展開に関する内容を把握する。 	
【準備学習】	事前学習として教員の提示したテーマについて、関連資料、書籍等を読んでおくこと。事後学習として講義中に提供した資料内容の理解を深めること。	
【授業展開】	<p>第1回: イントロダクション 本演習の進め方に関する説明と介護福祉制度に関する導入</p> <p>第2回: わが国の老人医療福祉施策の沿革 わが国における老人福祉政策について社会的背景に沿って検討する。</p> <p>第3回: 介護保険制度論① 介護保険制度の現状から政策的課題について検討する。</p> <p>第4回: 介護保険制度論② 要介護認定システムと高齢者の評価について検討する。</p> <p>第5回: 介護保険制度論③ 介護サービスの質の評価とそのマネジメント方法について検討する。</p> <p>第6回: 介護保険制度論④ 介護予防の政策課題とその効果について検討する。</p> <p>第7回: 介護保険制度論⑤ 福祉用具サービスの今後とその課題について検討する。</p> <p>第8回: 地域包括支援センターの機能と多職種連携 多様な専門職との連携と協働における課題について検討する。</p> <p>第9回: 日本の認知症ケア対策の現状と課題 日本の認知症ケア対策について、政策的課題について検討する。</p> <p>第10回: 福祉・介護人材育成と介護マネジメント 介護福祉分野における人材育成の課題を検討する。</p> <p>第11回: 地域社会と家庭介護の変容 地域社会における家庭形態の変容から在宅介護の課題について検討する。</p> <p>第12回: 地域包括ケアシステムの概念 地域包括ケアシステムの概念について政策的課題から検討する。</p> <p>第13回: 地域包括ケアシステムの構築と運用 地域包括ケアシステムの構築に関わる課題について考察する。</p> <p>第14回: 介護福祉サービスのイノベーション 介護福祉分野におけるイノベーションの新たな展開について検討する。</p> <p>第15回: まとめ</p>	
【評価方法】	授業回ごとの発表内容(40%)、最終レポートの内容(60%)	
【テキスト】	介護サービス論(有斐閣、筒井孝子)	
【参考書】		
【備考】	主体的な講義への取り組みを期待する。	
【社会人聴講生】		【科目等履修生】

【科目名】	特殊演習 I	Special Seminar I
【開講時期】	2024 年度前期	
【科目責任者】	竹下 誠二郎	
【担当教員】	竹下 誠二郎	
【授業の目的・方法】	<p>本演習は、博士論文にとって必要な研究方法論および理論の習得を目指す。</p> <p>競合するリベラル型と非リベラル型キャピタリズムを基とするガバナンス形式を比較し、企業・組織がとる行動原理とその戦略に関する研究能力を高める。ガバナンスのコンバージェンスの度合い、また異なったガバナンスのハイブリッド化の可能性も分析する。各ガバナンスのイノベーションへの取り組みなど、これらガバナンス形式がマネジメントに与えるインプリケーションも考察する。構造的なアングルからも分析を行い、個人重視の文化においてはエージェンシー理論に向かう傾向が強く、集団主義重視の文化においてはステュワードシップ理論へ傾斜するメカニズムも把握する。</p> <p>本演習では、履修生に内容を理解していることを確認するための発表を毎回課す。</p>	
【到達目標】	<p>本演習は、博士論文にとって必要な研究方法論および理論の習得を目指す。</p> <p>競合するリベラル型と非リベラル型キャピタリズムを基とするガバナンス形式を比較し、企業・組織がとる行動原理とその戦略に関する研究能力を高める。ガバナンスのコンバージェンスの度合い、また異なったガバナンスのハイブリッド化の可能性も分析する。各ガバナンスのイノベーションへの取り組みなど、これらガバナンス形式がマネジメントに与えるインプリケーションも考察する。構造的なアングルからも分析を行い、個人重視の文化においてはエージェンシー理論に向か</p>	
【準備学習】	事前に配られた参考文献・資料に目を通しておくこと	
【授業展開】	<p>第 1 回: イントロダクション 序論・予備的解説、またコースの概略・目的など。</p> <p>第 2 回: リベラル型キャピタリズムとそのガバナンスのマネジメント(1) リベラル型から派生する組織形態の強み、そしてそのスタイルを把握する。</p> <p>第 3 回: リベラル型キャピタリズムとそのガバナンスのマネジメント(2) 不平等や格差などの社会的コストに焦点を当て、リベラル型の弱みを把握する。</p> <p>第 4 回: 非リベラル型キャピタリズムとそのガバナンスのマネジメント(1) 非リベラル型から派生する組織形態の強み、そしてそのスタイルを把握する。</p> <p>第 5 回: 非リベラル型キャピタリズムとそのガバナンス形式(2) 順応度の低さ、バンキング・ガバナンスの功罪について考える。</p> <p>第 6 回: イノベーションとガバナンス 各ガバナンス下におけるイノベーションのマネジメントについて考察する。</p> <p>第 7 回: アントルプルナーシップ なぜアントルプルナーシップがリベラル型で成功しているのかを考察する。</p> <p>第 8 回: グローバル化にともなうコンバージェンスの動き ガバナンスのコンバージェンス(収斂)の動きについて考察する。</p> <p>第 9 回: 経営・組織文化の国際比較 各ガバナンスの背景にある経営における組織文化の許容度を比較分析する。</p> <p>第 10 回: 抵抗と反発 異なるガバナンスのコンバージェンスに対する抵抗とそのプロセスを分析する。</p> <p>第 11 回: ハイブリッド化 ガバナンスのハイブリッド化についての分析を行う。</p> <p>第 12 回: リーダーシップ グローバル化、コンバージェンスの動き、ハイブリッド化などの環境下におけるリーダーのマネジメントについて考査する。</p> <p>第 13 回: MNE が遭遇するチャレンジと機会 多国籍企業が遭遇するチャレンジと機会をガバナンスの変遷から探る。</p> <p>第 14 回: ステュワードシップ・コードに向けて 日本のステュワードシップ導入の長期インプリケーションについて考える。</p> <p>第 15 回: まとめ</p>	
【評価方法】	授業ごとの発表(50%)、レポート(50%)	
【テキスト】	適宜教員が資料を配布・指示する。	
【参考書】	(1) Berger, Suzanne, and Ronald Dore, Ronald (eds.) (1996), National Diversity and Global Capitalism, Cornell	

	University Press, Ithaca (2) Streeck, Wolfgang, and Yamamura, Kozo (eds.) (2003), The End of Diversity? Prospects for German and Japanese Capitalism, Cornell University Press, Ithaca (3) 吉田和男著「日本型経営システムの功罪」東洋経済新報社 (4) Berggren, Christian, and Nomura, Masami (1997), The Resilience of Corporate Japan, Paul Chapman Publishing Ltd, London		
【備考】	特になし		
【社会人聴講生】		【科目等履修生】	

【科目名】	特殊演習 I	Special Seminar I
【開講時期】	2024 年度前期	
【科目責任者】	上原 克仁	
【担当教員】	上原 克仁	
【授業の目的・方法】	本演習は、テキストとそこに挙げられた先行研究の輪読を通じ、博士論文執筆で求められる理論と研究手法の習得を目的とする。履修者には毎回、テキストもしくは論文の内容に関する報告を課す。	
【到達目標】		
【準備学習】		
【授業展開】	第 1 回: Economic Theories of Incentives in Organizations ① 第 2 回: Economic Theories of Incentives in Organizations ② 第 3 回: Clinical Papers in Organizational Economics ① 第 4 回: Clinical Papers in Organizational Economics ② 第 5 回: Experimental Organizational Economics ① 第 6 回: Experimental Organizational Economics ② 第 7 回: Insider Econometrics ① 第 8 回: Insider Econometrics ② 第 9 回: Personnel Economics ① 第 10 回: Personnel Economics ② 第 11 回: Incentives in Hierarchies ① 第 12 回: Incentives in Hierarchies ② 第 13 回: Theory and Evidence in Internal Labor Markets ① 第 14 回: Theory and Evidence in Internal Labor Markets ② 第 15 回: まとめ	
【評価方法】	授業回ごとの発表内容(50%)、最終レポートの内容(50%)	
【テキスト】	Robert Gibbons and John Roberts , The Handbook of Organizational Economics, Princeton Univ Press, 2012. の Part I から PartIVの部分	
【参考書】		
【備考】	特になし	
【社会人聴講生】		【科目等履修生】

【科目名】	特殊演習 I	Special Seminar I
【開講時期】	2024 年度前期	
【科目責任者】		
【担当教員】	*小西 敦	
【授業の目的・方法】	<p>本演習は博士論文作成にとって必要な研究方法論及び理論の習得を目指します。そのため、具体的なテーマを政策評価(行政評価を含む。以下同じ)に設定し、これに関する研究能力を高めます。</p> <p>第 1 に、政策評価に関する先行研究を履修者の関心に基づいて選択し、それらの政策評価論への貢献及び課題を検討します。</p> <p>第 2 に、我が国の中央政府及び地方政府における政策評価の制度の変遷を整理し、政策評価制度の内容とその導入や変化の理由を実証的に把握します。</p> <p>第 3 に、我が国の中央政府及び地方政府の具体的な政策評価制度の運用状況を分析し、その成果と課題を検討します。</p> <p>第 4 に、以上の際、政策評価制度の導入は先進国共通の取組であることから、国際比較の観点も取り込むこととします。</p> <p>本演習では、原則として、各回において、事前課題についての発表を行ってまいります。</p> <p>なお、テーマを政策評価以外の公共政策論や地方自治論上のテーマに変更することも可能な場合がありますので、本演習の履修を希望する場合には、事前に担当教員に連絡してください。</p> <p>本演習の実施方法や日程も、履修者と相談の上、決定しますので、履修希望者は、上記の履修前の連絡を必ずしてください。</p>	
【到達目標】	<p>自らで研究上の問を立て、それに関する先行研究を踏まえた考察を行い、問いに対する自分なりの答えを出し、以上の過程を言語化し、博士論文を構成する論文を 1 本以上、書けるようになること。</p>	
【準備学習】	<p>各回に事前に指定した文献を読んで、それに対する自分の見解を、授業中に発表できる形で準備すること。授業終了後、授業中の気づき等を踏まえて、自分の見解を見直し、深化させた上で、言語化すること。</p>	
【授業展開】	<p>下記の日程については、履修者と相談の上、変更があり得ます。</p> <p>第 1 回: ガイダンス: 研究テーマ及び本演習の進め方を説明する。</p> <p>第 2 回: 政策評価の概念: 政策評価の定義について、多面的に考察する。</p> <p>第 3 回～第 9 回: 中央政府の政策評価の検討: 各回、以下の評価について、先行研究・制度変遷・運用状況等を検討する。</p> <p>第 3 回: 行政機関の政策評価等に関する法律(総論)</p> <p>第 4 回: 公共事業評価(各論①)</p> <p>第 5 回: 政府開発援助(ODA)評価(各論②)</p> <p>第 6 回: 研究開発評価(各論③)</p> <p>第 7 回: 実績評価(各論④)</p> <p>第 8 回: 規制評価(各論⑤)</p> <p>第 9 回: 租税特別措置評価(各論⑥)</p> <p>第 10 回～第 13 回: 地方政府の政策評価の検討: 各回、以下の団体の政策評価について、先行研究・制度変遷・運用状況等を検討する。</p> <p>第 10 回: 都道府県</p> <p>第 11 回: 指定都市・中核市・(施行時)特例市</p> <p>第 12 回: 一般市</p> <p>第 13 回: 町村</p> <p>第 14 回: 政策評価の成果と課題: ここまでの検討を踏まえ、実際の政策評価制度の見直し動向にも視野に入れて、わが国の政策評価の成果と課題を実証的に分析する。</p> <p>第 15 回: まとめ</p>	
【評価方法】	授業回ごとの発表内容(4 割)、最終レポートの内容(6 割)。	
【テキスト】	源由理子・大島巖『プログラム評価ハンドブック』晃洋書房、2020 年	
【参考書】	<p>宇賀克也(2002)『政策評価の法制度』有斐閣</p> <p>山谷清志(2012)『政策評価』ミネルヴァ書房</p> <p>南島和久(2020)『政策評価の行政学』晃洋書房</p> <p>西出順郎(2020)『政策はなぜ検証できないのか 政策評価制度の研究』勁草書房</p>	
【備考】	学習内容に対する主体的な取り組みを期待します。	

	国や自治体で政策立案・政策評価・予算編成等に携わった担当教員の行政実務経験を授業内容に反映するように努めます。		
【社会人聴講生】	聴講可（通常の履修学生と同様のレポート等による評価を受けること）	【科目等履修生】	履修可（通常の履修学生と同様のレポート等による評価を受けること）

【科目名】	特殊演習 I	Special Seminar I
【開講時期】	2024 年度前期	
【科目責任者】	木村 綾	
【担当教員】	木村 綾	
【授業の目的・方法】	<p>本演習は博士論文作成にとって必要な研究方法論および理論の習得を目指す。そこで社会福祉制度および地域福祉サービスにおけるイノベーションの理解に重要な制度における住民マネジメントの仕組み、および地域福祉サービスにおける実践、地域福祉分野における新たなサービス事業の展開に関する演習を行う。特に①インフォーマルサポートである地域課題に関する検討、②地域包括ケア体制を構築する中での社会福祉協議会、住民組織の役割などを主題に、先行研究の把握と検討方法、概念および理論構築の仕方、データ構築手法、分析手法などの観点から、演習を行う。</p> <p>本演習では、履修生に内容を理解していることを確認するための発表を毎回課す。</p>	
【到達目標】	博士論文作成にとって必要な研究方法論および理論(福祉・保健医療領域)の習得を目指す。	
【準備学習】		
【授業展開】	<p>第1回: イントロダクション 本演習の進め方に関する説明と介護福祉制度に関する導入。</p> <p>第2回: わが国の社会福祉施策の沿革 わが国における老人福祉政策について社会的背景に沿って検討する。</p> <p>第3回: 社会福祉制度論① 社会福祉制度の現状から政策的課題について検討する。</p> <p>第4回: 社会福祉制度論② 社会福祉実践と地域社会の関わりについて検討する。</p> <p>第5回: 地域福祉制度論① 地域福祉制度の現状から政策的課題について検討する。</p> <p>第6回: 地域福祉制度論② 住民活動と地域の政策課題とその効果について検討する。</p> <p>第7回: 地域福祉制度論③ 地域福祉サービスの今後とその課題について検討する。</p> <p>第8回: 福祉人材の育成とマネジメント 地域福祉分野における人材育成の課題を検討する。</p> <p>第9回: 日本の地域ケア対策の現状と課題 日本の地域ケア対策について、政策的課題について検討する。</p> <p>第10回: 地域包括ケアシステムと多職種連携 多様な専門職との連携と協働における課題について検討する。</p> <p>第11回: 福祉人材の育成とマネジメント 地域福祉分野における人材育成の課題を検討する。</p> <p>第12回: 地域社会と家庭介護の変容 地域社会における家庭形態の変容から地域ケアの課題について検討する。</p> <p>第13回: 地域包括ケアシステムの構築と運用 地域包括ケアシステムの構築に関わる課題について考察する。</p> <p>第14回: 地域福祉サービスのイノベーション 福祉分野におけるイノベーションの新たな展開について検討する。</p> <p>第15回: まとめ</p>	
【評価方法】	授業回ごとの発表内容(40%)、最終レポートの内容(60%)	
【テキスト】	適宜資料は用意する。	
【参考書】		
【備考】		
【社会人聴講生】	不可	【科目等履修生】 不可

【科目名】	特殊演習 I	Special Seminar I
【開講時期】	2024 年度前期	
【科目責任者】	大久保 あかね	
【担当教員】	大久保 あかね	
【授業の目的・方法】	<p>本演習は、博士論文作成を指導するものである。したがって、博士論文作成に必要な先行研究のレビューから研究計画、調査方法の選定など論文作成の基礎の習得を目指す。</p> <p>研究テーマは、人々の観光行動から、地域における観光を核としたまちづくりに至るまで、広く観光をキーワードとした社会現象を想定し、観光学にかかわる専門的な研究方法を応用する。</p> <p>講義の中で観光調査などフィールドワークを実施し、地域課題に実践的に取り組むものとする。</p>	
【到達目標】	博士論文の執筆に向け、自身の研究計画を立てる、進めること。	
【準備学習】	論文・海外ジャーナルなどに目を通す習慣をつける。	
【授業展開】	<p>第1回:オリエンテーション</p> <p>第2回:地域課題における観光の役割(1) 観光事象の歴史の変遷から</p> <p>第3回:地域課題における観光の役割(2) 既存観光地における資源活用</p> <p>第4回:地域課題における観光の役割(3) 「観光地化」への期待</p> <p>第5回:観光研究の方法論(1) 観光への様々な研究アプローチ</p> <p>第6回:観光研究の方法論(2) 定性的データの取得方法と分析</p> <p>第7回:観光研究の方法論(3) 定量的データの取得方法と分析</p> <p>第8回:観光研究の方法論(4) 観光調査の設計と分析</p> <p>第9回:地域課題に対する観光調査の実践(1) 研究対象地の選定と基礎調査</p> <p>第10回:地域課題に対する観光調査の実践(2) 調査方法の検討と調査ツールの作成</p> <p>第11回:地域課題に対する観光調査の実践(3) 予備調査の分析と本調査の企画</p> <p>第12回:地域課題に対する観光調査の実践(4) 本調査</p> <p>第13回:地域課題に対する観光調査の実践(5) 調査データの分析と考察</p> <p>第14回:地域課題に対する観光調査の実践(5) 調査データの活用</p> <p>第15回:まとめ</p>	
【評価方法】	授業回ごとの発表内容(50%)、最終レポートの内容(50%)	
【テキスト】	講義ごとに指定する	
【参考書】	研究の進捗状況に合わせ、適宜提示する。	
【備考】	調査等でフィールドワークを行うので、必ず参加すること。	
【社会人聴講生】	不可	【科目等履修生】 不可

【科目名】	特殊演習 I	Special Seminar I
【開講時期】	2024 年度前期	
【科目責任者】	*松岡 清志	
【担当教員】	*松岡 清志	
【授業の目的・方法】	<p>政策科学は政治学、行政学、経済学をはじめとする学際的要素の強い学問です。それゆえ、政策分析に主眼を置く博士論文を執筆する際には、多様なアプローチの中からどれが最も適するかを比較考量することが重要です。本講義は、その前提となる視座や理論枠組みを身につけることを目的とします。</p> <p>講義の前半は、毎回1～2名を報告者として割り当て、文献の該当部分に関する報告を行い、報告者より示された疑問点やディスカッションポイントについて、受講者相互の議論および担当教員の解説を交える形で進めます。その後、前半で学んだ視座や理論枠組みをご自身の研究にどう活かすかを報告していただきます。</p>	
【到達目標】	政策分析における視座および理論枠組みを多角的に整理し、様々なアプローチを組み合わせた博士論文を執筆できるようになることを目標とします。	
【準備学習】	受講前に文献の該当箇所を読んだうえで、疑問点およびディスカッションで取り上げるテーマについて整理しておくことが求められます(運営上の観点から報告者を毎回 1～2 名割り当てますが、上記準備は報告者以外も同様です)。受講後には、関連する文献の参照、国内外の事例の探索を積極的に行ってください。	
【授業展開】	第 1 回 イン트로ダクションおよび報告者の決定 第 2 回 概念および研究領域としての公共政策とは何か 第 3 回 政治と政策の関係 第 4 回 政策に影響を及ぼす存在:アクターと制度 第 5 回 政策デザイン 第 6 回 政策過程(1) 第 7 回 政策過程(2) 第 8 回 多様な政策分析手法 第 9 回 政策評価:インパクト分析とプログラム評価 第 10 回 政策実施 第 11 回 政策研究の新たな方向性 第 12 回 政策科学の展望 第 13 回 政策科学の活用(1) 第 14 回 政策科学の活用(2) 第 15 回 総括	
【評価方法】	講義における報告と討論への参加(60%)、レポート結果(40%)から総合的に評価いたします。	
【テキスト】	受講者との協議によって決定いたしますが、現時点では、Kevin B. Smith, Christopher Larimer, "The Public Policy Theory Primer(3rd edition)", Routledge, 2017 を予定しています。	
【参考書】	秋吉貴雄・伊藤修一郎・北山俊哉『公共政策学の基礎(第3版)』有斐閣、2020。 北山俊哉・稲継裕昭(編)『テキストブック地方自治(第3版)』東洋経済新報社、2021。 西岡晋・廣川嘉裕(編)『行政学』文眞堂、2021。 若林恵(責任編集)『NEXT GENERATION GOVERNMENT 次世代ガバメント 小さくて大きい政府のつくり方』日本経済新聞出版、2019。 ザビーネ＝クールマン・ヘルムート＝ヴォルマン(著)、縣公一郎・久邇良子・岡本三彦・宇野二郎(訳)『比較行政学入門－ヨーロッパ行政改革の動向－』成文堂、2021。 その他、講義中にご紹介いたします。	
【備考】	担当者は、2020 年度までデジタル・ガバメントに関する研究機関に在籍し、国および地方自治体におけるデジタル技術の活用、公共サービス提供における行政と民間および個人の協働などについて研究を行うとともに、行政機関の先行事例に関する調査やガイドライン作成の支援を行った経験を有しております。本講義では、公共政策および公共サービスに関する最近の動向についても解説する予定です。	
【社会人聴講生】	可能です。但し、評価方法につきましては同一の条件となりますのでご了承ください。	【科目等履修生】 可能です。但し、評価方法につきましては同一の条件となりますのでご了承ください。

【科目名】	特殊演習 I	Special Seminar I
【開講時期】	2024 年度前期	
【科目責任者】		
【担当教員】	内海 佐和子	
【授業の目的・方法】	指導教員の指導のもと、博士研究を進める	
【到達目標】		
【準備学習】		
【授業展開】	第 1 回: ガイダンス 第 2 回以降は履修者と相談のうえ、進める よって、第 1 回は必ず出席すること	
【評価方法】	博士研究の進捗状況や報告内容により総合的に評価する	
【テキスト】	なし	
【参考書】	必要に応じて、適宜、紹介する	
【備考】	原則として対面で、ディスカッションを中心に行う	
【社会人聴講生】	不可	【科目等履修生】 不可

【科目名】	特殊演習 I	Special Seminar I
【開講時期】	2024 年度前期	
【科目責任者】	井本 智明	
【担当教員】	井本 智明	
【授業の目的・方法】	<p>本演習は博士論文作成にとって必要なスキルの習得を目指す。</p> <p>幾何学的な性質を有したデータに対する分析について、特に円周上や球面上のデータのような例を序論的に学び、そこからさらに文献を選択して幾何学的な性質を有したデータ分析特有の技法を学び、研究・討論を行う。</p> <p>本演習では、履修生に内容を理解していることを確認するための発表を、実習の回以外では毎回課す。</p>	
【到達目標】	博士論文作成にとって必要なスキル、特に幾何学的な性質を持つデータの処理技術を身につける。	
【準備学習】	<ul style="list-style-type: none"> ・前回講義の復習 ・次回講義での発表のための準備 	
【授業展開】	<p>第1回： Statistical Shape Analysis の概要</p> <p>第2回： Directional Statistics から Statistical Shape Analysis への歴史的展開</p> <p>第 1, 2 回で、幾何学的な性質を有したデータに関する必要な概念とその歴史的展開を俯瞰する。</p> <p>第3回： Directional Statistics における円周上データの理論（文献購読）</p> <p>第4回： Directional Statistics における円周上データの理論（文献購読、討論）</p> <p>第5回： Directional Statistics における円周上データの理論（文献購読、討論）</p> <p>第6回： Directional Statistics における円周上データの理論（応用についての討論）</p> <p>第3～6回で、Statistical Shape Analysis の典型的な例の 1 つである Directional Statistics の話題を取り上げ、その理論について習得する。</p> <p>第7回： Directional Statistics における球面上データの理論（文献購読）</p> <p>第8回： Directional Statistics における球面上データの理論（文献購読、討論）</p> <p>第9回： Directional Statistics における球面上データの理論（文献購読、討論）</p> <p>第 10 回： Directional Statistics における球面上データの理論（応用についての討論）</p> <p>第7～10 回で、円周上データ分析を拡張した球面上データ分析の話題を取り上げ、その基礎と理論について習得する。</p> <p>第 11 回： Statistical Shape Analysis における基礎（文献購読）</p> <p>第 12 回： Statistical Shape Analysis における基礎（文献購読、討論）</p> <p>第 13 回： Statistical Shape Analysis における基礎（文献購読、討論）</p> <p>第 14 回： Statistical Shape Analysis における基礎（応用についての討論）</p> <p>第 11～14 回で、Statistical Shape Analysis について習得し、様々な種類のデータ処理法について習得する。</p>	
【評価方法】	授業回ごとの発表、実習内容（50%）、最終レポート（50%）	
【テキスト】	授業時に選択する。	
【参考書】	<p>Mardia, K.V. and Jupp, P.E. (2000) Directional Statistics. John Wiley & Sons, London</p> <p>Dryden, I.L. and Mardia, K.V. (2016) Statistical Shape Analysis: With Applications in R, 2nd Edition. John Wiley & Sons, London.</p>	
【備考】	なし	
【社会人聴講生】	聴講不可	【科目等履修生】 聴講不可

【科目名】	特殊演習 II	Special Seminar II
【開講時期】	2024 年度前期	
【科目責任者】	湯瀬 裕昭	
【担当教員】	湯瀬 裕昭	
【授業の目的・方法】	<p>本演習は、博士論文作成にとって必要なスキルの習得を目指す。そのため、情報システムの中でも特に応用的な意味合いが強い、教育分野、福祉分野などで活用されている情報システムに焦点を当て、それらの情報システムの技術開発や効果的な活用のために必要となる技術や理論等に関して、関連文献の講読、学術論文を含む技術文書の作成演習、プレゼンテーションの演習を行なう。</p> <p>本演習では、履修生に内容を理解していることを確認するための発表を、教員による説明の回以外では毎回課す。</p>	
【到達目標】	博士論文作成にとって必要な情報システム関連のスキルを習得する。	
【準備学習】	授業前に講義資料等に目を通し理解しておくこと。授業後に講義内容を復習し、十分に理解を深めておくこと。	
【授業展開】	<p>第1回:教育・福祉分野等での情報技術活用の概観 教育・福祉分野等における情報技術活用を事例を示しながら俯瞰する。また、第2回から第9回までの各トピックについて講読文献を決定し、文献講読方法を説明する。</p> <p>第2回:情報教育の関連文献の講読 以下、第9回まで、初回に決定した各回のトピックに沿った講読文献について、特に査読論文については新規性、獨創性、有用性の理解に重点を置いて講読を行う。</p> <p>第3回:e-Learningの関連文献の講読</p> <p>第4回:遠隔教育システムの関連文献の講読(1)</p> <p>第5回:遠隔教育システムの関連文献の講読(2)</p> <p>第6回:福祉情報システム・支援工学の関連文献の講読(1)</p> <p>第7回:福祉情報システム・支援工学の関連文献の講読(2)</p> <p>第8回:福祉情報システム・支援工学の関連文献の講読(3)</p> <p>第9回:他分野(防災等)の情報システムの関連文献の講読</p> <p>第10回:技術文書作成技法 論文等を含む技術文書作成の重要事項を説明する。</p> <p>第11回:技術文書作成演習(1) 以下、第12回まで、履修生の現在の研究内容などを用いて技術文書作成演習を行う。</p> <p>第12回:技術文書作成演習(2)</p> <p>第13回:プレゼンテーション技法 プレゼンテーション資料作成と発表方法の重要事項を説明する。</p> <p>第14回:プレゼンテーション演習 履修生の現在の研究内容などを用いてプレゼンテーション演習を行う。</p> <p>第15回:まとめ これまでの演習を通して学んだことを統一的に整理し、各人の研究につなげることを意識づけさせる。</p>	
【評価方法】	授業回ごとの発表内容(60%)、最終レポートの内容(40%)	
【テキスト】	適宜教員が資料を配付あるいは指示する。	
【参考書】	Walter Dick, Lou Carey, James O. Carey: "The Systematic Design of Instruction," Allyn & Bacon 市川熹,手嶋教之:『福祉と情報技術』,オーム社	
【備考】	特になし	
【社会人聴講生】	受入不可	【科目等履修生】 受入不可

【科目名】	特殊演習 II	Special Seminar II
【開講時期】	2024 年度前期	
【科目責任者】	武藤 伸明	
【担当教員】	武藤 伸明	
【授業の目的・方法】	<p>本演習は博士論文作成にとって必要なスキルの習得を目指す。</p> <p>特にグラフ論、組合せ論、最適化問題や計算幾何学、線形代数問題の分野について、コンピュータで扱うためのアルゴリズムおよび実装の技法について、文献を選択し特有の技法を学び、研究、討論を行う。</p> <p>本演習では、受講生に内容を理解していることを確認するための発表を、実習の回以外では毎回課す。</p>	
【到達目標】	博士論文作成にとって必要なスキル、特にコンピュータによる高速処理技術を身につける。	
【準備学習】		
【授業展開】	<p>第1回：大規模データの計算、処理アルゴリズムの概要</p> <p>第2回：大規模データの計算、処理アルゴリズムの歴史的展開</p> <p>第3回：線形代数問題における大規模データ処理（文献購読）</p> <p>第4回：線形代数問題における大規模データ処理（文献購読、討論）</p> <p>第5回：線形代数問題における大規模データ処理（アルゴリズム研究）</p> <p>第6回：線形代数問題とスーパーコンピューティング</p> <p>第7回：最適化問題における大規模データ処理（文献購読）</p> <p>第8回：最適化問題における大規模データ処理（文献購読、討論）</p> <p>第9回：最適化問題における大規模データ処理（アルゴリズム研究）</p> <p>第10回：最適化問題における大規模データ処理（プログラム実装）</p> <p>第11回：計算幾何学問題における大規模データ処理（文献購読）</p> <p>第12回：計算幾何学問題における大規模データ処理（文献購読、討論）</p> <p>第13回：計算幾何学問題における大規模データ処理（アルゴリズム研究、プログラム実装）</p> <p>第14回：計算幾何学とコンピュータハードウェア</p> <p>第15回：総括</p>	
【評価方法】	授業回ごとの発表、実習内容（50%）、最終レポート（50%）	
【テキスト】	授業時に配布する。	
【参考書】	<p>Henri Cohen. A Course in Computational Algebraic Number Theory. Springer.</p> <p>William H. Press, et. Al. Numerical Recipes 3rd Edition: The Art of Scientific Computing. Cambridge University Press.</p>	
【備考】		
【社会人聴講生】	不可	【科目等履修生】 不可

【科目名】	特殊演習 II	Special Seminar II
【開講時期】	2024 年度前期	
【科目責任者】	渡邊 貴之	
【担当教員】	渡邊 貴之	
【授業の目的・方法】	<p>本演習は、博士論文作成にとって必要な理論やスキルの習得を目指す。そのため、情報通信産業分野を対象とした CAE 解析技術を高度化・高性能化するための最先端のシミュレーションプログラム構築技術について、ソフトウェア・ハードウェアの両面から演習を行う。クラスタ、マルチコア、メニーコア及び高速ネットワークを活用した並列分散シミュレーション技術について、関連論文の調査、プログラミング技術を学ぶ。</p> <p>本演習では、履修生に内容を理解していることを確認するための発表を、教員による説明の回以外では毎回課す。</p>	
【到達目標】		
【準備学習】		
【授業展開】	<p>第1回:教育・福祉分野等での情報技術活用の概観 教育・福祉分野等における情報技術活用を事例を示しながら俯瞰する。また、第2回から第9回までの各トピックについて講読文献を決定し、文献講読方法を説明する。</p> <p>第2回:情報教育の関連文献の講読 以下、第9回まで、初回に決定した各回のトピックに沿った講読文献について、特に査読論文については新規性、獨創性、有用性の理解に重点を置いて講読を行う。</p> <p>第3回:e-Learning の関連文献の講読</p> <p>第4回:遠隔教育システムの関連文献の講読(1)</p> <p>第5回:遠隔教育システムの関連文献の講読(2)</p> <p>第6回:福祉情報システム・支援工学の関連文献の講読(1)</p> <p>第7回:福祉情報システム・支援工学の関連文献の講読(2)</p> <p>第8回:福祉情報システム・支援工学の関連文献の講読(3)</p> <p>第9回:他分野(防災等)の情報システムの関連文献の講読</p> <p>第10回:技術文書作成技法 論文等を含む技術文書作成の重要事項を説明する。</p> <p>第11回:技術文書作成演習(1) 以下、第12回まで、履修生の現在の研究内容などを用いて技術文書作成演習を行う。</p> <p>第12回:技術文書作成演習(2)</p> <p>第13回:プレゼンテーション技法 プレゼンテーション資料作成と発表方法の重要事項を説明する。</p> <p>第14回:プレゼンテーション演習 履修生の現在の研究内容などを用いてプレゼンテーション演習を行う。</p> <p>第15回:まとめ これまでの演習を通して学んだことを統一的に整理し、各人の研究につなげることを意識づけさせる。</p>	
【評価方法】	授業回ごとの発表内容(60%)、最終レポートの内容(40%)	
【テキスト】	適宜教員が資料を配付あるいは指示する。	
【参考書】	Walter Dick, Lou Carey, James O. Carey: "The Systematic Design of Instruction," Allyn & Bacon 市川熹,手嶋教之:『福祉と情報技術』,オーム社	
【備考】	特になし	
【社会人聴講生】		【科目等履修生】

【科目名】	特殊演習Ⅱ	Special Seminar II
【開講時期】	2024 年度前期	
【科目責任者】	岩崎邦彦	
【担当教員】	岩崎邦彦	
【授業の目的・方法】	<p>本演習は博士論文作成にとって必要な研究方法論、理論、および、応用研究力の習得を目指す。</p> <p>具体的には、マーケティングの専門的な研究を行うための理論と研究方法論について理解するとともに、マーケティング研究で用いられる代表的な定性的リサーチ手法と定量的リサーチ手法の理解を深める。さらに、農産物、観光、中小企業などの分野において、地域が抱えるマーケティング課題を取り上げ、関連研究のレビューとクラス討議を行い、マーケティングに関する応用研究力、実践的応用力を習得する。</p> <p>本演習では、履修生に内容を理解していることを確認するための発表を毎回行う。</p>	
【到達目標】	マーケティングに関する深い知識と実践的な応用力を備えた専門的職業人の育成、マーケティングで地域に貢献できる人材の育成を目標とする。	
【準備学習】	マーケティングや関連分野に関するジャーナルや文献を活用し、自らが研究対象とする分野の研究動向を、常にアップデートすること。	
【授業展開】	<p>第1回:オリエンテーション</p> <p>第2回:マーケティング理論(1) セグメンテーションポジショニング等に関する理論</p> <p>第3回:マーケティング理論(2) 製品、プロモーション、価格戦略等に関する理論</p> <p>第4回:マーケティング研究の方法論(1) 非相互作用的・経済学的マーケティング研究、相互作用的・経済学的マーケティング研究</p> <p>第5回:マーケティング研究の方法論(2) 非相互作用的・非経済学的マーケティング研究、相互作用的・非経済学的マーケティング研究</p> <p>第6回:定性的マーケティングリサーチ(1) 定性的調査の本質とアプローチ</p> <p>第7回:定性的マーケティングリサーチ(2) フォーカスグループ、デプスインタビュー、定性データ分析</p> <p>第8回:定量的マーケティングリサーチ(1) 定量的調査の本質とアプローチ</p> <p>第9回:定量的マーケティングリサーチ(2) 調査票デザイン、サンプリング、定量データ分析</p> <p>第10回:地域マーケティングの理論と実践(1) 地域ブランドに関する応用マーケティング研究</p> <p>第11回:地域マーケティングの理論と実践(2) スモールビジネスに関する応用マーケティング研究</p> <p>第12回:地域マーケティングの理論と実践(3) 地域商業に関する応用マーケティング研究</p> <p>第13回:地域マーケティングの理論と実践(4) 観光・サービスに関する応用マーケティング研究</p> <p>第14回:地域マーケティングの理論と実践(5) 農産物に関する応用マーケティング研究</p> <p>第15回:まとめ</p>	
【評価方法】	各回のプレゼンテーション内容、講義への取組、課題レポートの内容を評価。 総合的な評価をスコア化し、本研究科・採点評価基準に沿って成績評価。	
【テキスト】	<ul style="list-style-type: none"> ・Kotler, Philip and Kevin Keller, Marketing Management, International Edition, Prentice Hall College Division. ・Malhotra, Naresh, Marketing Research: An Applied Orientation, Pearson Education. ・Journal of Marketing, Journal of Retailing、流通研究などの学術誌に掲載 	
【参考書】	演習内容に応じて適宜紹介	
【備考】	積極的な授業での発言、各回のプレゼンテーションが求められる	
【社会人聴講生】	「受入不可」(院生を対象とした特殊演習のため)	【科目等履修生】

【科目名】	特殊演習Ⅱ	Special Seminar II
【開講時期】	2024年度前期	
【科目責任者】	岸 昭雄	
【担当教員】	岸 昭雄	
【授業の目的・方法】	本演習は博士論文作成にとって必要な研究方法論および理論の習得を目指す。そのため、公共部門が政策を通じて社会に与えるインパクトについて、政策評価の観点から考察する。政策評価の基礎理論を踏まえた上で、実際の政策実施に当たって考慮すべき事柄について実践的に考察を行う。具体的には、政策立案の際の説明責任(アカウンタビリティ)、住民参加(パブリックコメント、パブリックインボルブメント)、財源問題(PPP、PFI)といった課題に対して、具体的な事例をもとに考察を行う。本演習では、履修生の理解促進のため定期的に発表を課し、ディスカッション方式で演習を進める。	
【到達目標】	受講生の博士論文研究テーマと照らし合わせ、有用な知識を身につけること	
【準備学習】	現代社会において政策の直面する課題について把握しておくこと	
【授業展開】	第1回:政策立案の考え方 第2回:政策評価の理論1 第3回:政策評価の理論2 第4回:政策評価の理論3 第5回:公共部門の説明責任(アカウンタビリティ)1 第6回:公共部門の説明責任(アカウンタビリティ)2 第7回:政策立案における住民参加1 第8回:政策立案における住民参加2 第9回:政策立案における住民参加3 第10回:政策の財源確保問題1 第11回:政策の財源確保問題2 第12回:政策の財源確保問題3 第13回:政策評価の実例1 第14回:政策評価の実例2 第15回:まとめ	
【評価方法】	各回の発表、ディスカッション内容から総合的に評価する	
【テキスト】	講義の際に適宜指示する。	
【参考書】	講義の際に適宜指示する。	
【備考】	特になし	
【社会人聴講生】	不可	【科目等履修生】 不可

【科目名】	特殊演習Ⅱ	Special Seminar II
【開講時期】	2024 年度前期	
【科目責任者】	東野 定律	
【担当教員】	*東野 定律	
【授業の目的・方法】	<p>本演習は博士論文作成にとって必要な研究方法論および理論の習得を目指す。そこで介護保険制度および介護サービスにおけるイノベーションの理解に重要な介護保険制度における要介護認定の仕組み、および介護サービスにおける質の評価、介護分野における新たなサービス事業の展開に関する演習を行う。特に①地域の専門職の連携機能の測定と評価、②インフォーマルサポートである家族介護の負担感の評価を含めた在宅介護の課題に関する検討③地域包括ケア体制を構築する保険者である自治体機能の評価などを主題に、先行研究の把握と検討方法、概念および理論構築の仕方、データ構築手法、分析手法などの観点から、演習を行う。</p> <p>本演習では、履修生に内容を理解していることを確認するための発表を毎回課す。</p>	
【到達目標】	<ol style="list-style-type: none"> 1. 博士論文作成にとって必要な研究方法論および理論の習得 2. 特に介護保険制度および介護サービスにおけるイノベーションの理解に重要な介護保険制度における要介護認定の仕組み、および介護サービスにおける質の評価、介護分野における新たなサービス事業の展開に関する内容を把握する。 	
【準備学習】	事前学習として教員の提示したテーマについて、関連資料、書籍等を読んでおくこと。事後学習として講義中に提供した資料内容の理解を深めること。	
【授業展開】	<p>第1回: イントロダクション 本演習の進め方に関する説明と介護福祉制度に関する導入</p> <p>第2回: わが国の老人医療福祉施策の沿革 わが国における老人福祉政策について社会的背景に沿って検討する。</p> <p>第3回: 介護保険制度論① 介護保険制度の現状から政策的課題について検討する。</p> <p>第4回: 介護保険制度論② 要介護認定システムと高齢者の評価について検討する。</p> <p>第5回: 介護保険制度論③ 介護サービスの質の評価とそのマネジメント方法について検討する。</p> <p>第6回: 介護保険制度論④ 介護予防の政策課題とその効果について検討する。</p> <p>第7回: 介護保険制度論⑤ 福祉用具サービスの今後とその課題について検討する。</p> <p>第8回: 地域包括支援センターの機能と多職種連携 多様な専門職との連携と協働における課題について検討する。</p> <p>第9回: 日本の認知症ケア対策の現状と課題 日本の認知症ケア対策について、政策的課題について検討する。</p> <p>第10回: 福祉・介護人材育成と介護マネジメント 介護福祉分野における人材育成の課題を検討する。</p> <p>第11回: 地域社会と家庭介護の変容 地域社会における家庭形態の変容から在宅介護の課題について検討する。</p> <p>第12回: 地域包括ケアシステムの概念 地域包括ケアシステムの概念について政策的課題から検討する。</p> <p>第13回: 地域包括ケアシステムの構築と運用 地域包括ケアシステムの構築に関わる課題について考察する。</p> <p>第14回: 介護福祉サービスのイノベーション 介護福祉分野におけるイノベーションの新たな展開について検討する。</p> <p>第15回: まとめ</p>	
【評価方法】	授業回ごとの発表内容(40%)、最終レポートの内容(60%)	
【テキスト】	介護サービス論(有斐閣、筒井孝子)	
【参考書】		
【備考】	主体的な講義への取り組みを期待する。	
【社会人聴講生】		【科目等履修生】

【科目名】	特殊演習Ⅱ	Special Seminar II
【開講時期】	2024 年度前期	
【科目責任者】	竹下 誠二郎	
【担当教員】	竹下 誠二郎	
【授業の目的・方法】	<p>本演習は、博士論文にとって必要な研究方法論および理論の習得を目指す。</p> <p>競合するリベラル型と非リベラル型キャピタリズムを基とするガバナンス形式を比較し、企業・組織がとる行動原理とその戦略に関する研究能力を高める。ガバナンスのコンバージェンスの度合い、また異なったガバナンスのハイブリッド化の可能性も分析する。各ガバナンスのイノベーションへの取り組みなど、これらガバナンス形式がマネジメントに与えるインプリケーションも考察する。構造的なアングルからも分析を行い、個人重視の文化においてはエージェンシー理論に向かう傾向が強く、集団主義重視の文化においてはステュワードシップ理論へ傾斜するメカニズムも把握する。</p> <p>本演習では、履修生に内容を理解していることを確認するための発表を毎回課す。</p>	
【到達目標】	<p>本演習は、博士論文にとって必要な研究方法論および理論の習得を目指す。</p> <p>競合するリベラル型と非リベラル型キャピタリズムを基とするガバナンス形式を比較し、企業・組織がとる行動原理とその戦略に関する研究能力を高める。ガバナンスのコンバージェンスの度合い、また異なったガバナンスのハイブリッド化の可能性も分析する。各ガバナンスのイノベーションへの取り組みなど、これらガバナンス形式がマネジメントに与えるインプリケーションも考察する。構造的なアングルからも分析を行い、個人重視の文化においてはエージェンシー理論に向か</p>	
【準備学習】	事前に配布された資料に目を通すこと。	
【授業展開】	<p>第1回：イントロダクション 序論・予備的解説、またコースの概略・目的など。</p> <p>第2回：リベラル型キャピタリズムとそのガバナンスのマネジメント(1) リベラル型から派生する組織形態の強み、そしてそのスタイルを把握する。</p> <p>第3回：リベラル型キャピタリズムとそのガバナンスのマネジメント(2) 不平等や格差などの社会的コストに焦点を当て、リベラル型の弱みを把握する。</p> <p>第4回：非リベラル型キャピタリズムとそのガバナンスのマネジメント(1) 非リベラル型から派生する組織形態の強み、そしてそのスタイルを把握する。</p> <p>第5回：非リベラル型キャピタリズムとそのガバナンス形式(2) 順応度の低さ、バンキング・ガバナンスの功罪について考える。</p> <p>第6回：イノベーションとガバナンス 各ガバナンス下におけるイノベーションのマネジメントについて考察する。</p> <p>第7回：アントルプルナーシップ なぜアントルプルナーシップがリベラル型で成功しているのかを考察する。</p> <p>第8回：グローバル化にともなうコンバージェンスの動き ガバナンスのコンバージェンス(収斂)の動きについて考察する。</p> <p>第9回：経営・組織文化の国際比較 各ガバナンスの背景にある経営における組織文化の許容度を比較分析する。</p> <p>第10回：抵抗と反発 異なるガバナンスのコンバージェンスに対する抵抗とそのプロセスを分析する。</p> <p>第11回：ハイブリッド化 ガバナンスのハイブリッド化についての分析を行う。</p> <p>第12回：リーダーシップ グローバル化、コンバージェンスの動き、ハイブリッド化などの環境下におけるリーダーのマネジメントについて考査する。</p> <p>第13回：MNE が遭遇するチャレンジと機会 多国籍企業が遭遇するチャレンジと機会をガバナンスの変遷から探る。</p> <p>第14回：ステュワードシップ・コードに向けて 日本のステュワードシップ導入の長期インプリケーションについて考える。</p> <p>第15回：まとめ</p>	
【評価方法】	授業ごとの発表(50%)、レポート(50%)	
【テキスト】	適宜教員が資料を配布・指示する。	
【参考書】	(1)Berger, Suzanne, and Ronald Dore, Ronald (eds.)(1996), National Diversity and Global Capitalism, Cornell	

	University Press, Ithaca (2) Streeck, Wolfgang, and Yamamura, Kozo (eds.) (2003), The End of Diversity? Prospects for German and Japanese Capitalism, Cornell University Press, Ithaca (3) 吉田和男著「日本型経営システムの功罪」東洋経済新報社 (4) Berggren, Christian, and Nomura, Masami (1997), The Resilience of Corporate Japan, Paul Chapman Publishing Ltd, London		
【備考】	特になし		
【社会人聴講生】	受け入れる	【科目等履修生】	受け入れる

【科目名】	特殊演習Ⅱ	Special Seminar II
【開講時期】	2024 年度前期	
【科目責任者】	上原 克仁	
【担当教員】	上原 克仁	
【授業の目的・方法】	本演習は、テキストとそこに挙げられた先行研究の輪読を通じ、博士論文執筆で求められる理論と研究方法の習得を目的とする。履修者には毎回、テキストもしくは論文の内容に関する報告を課す。	
【到達目標】		
【準備学習】		
【授業展開】	第 1 回: Economic Theories of Incentives in Organizations ① 第 2 回: Economic Theories of Incentives in Organizations ② 第 3 回: Clinical Papers in Organizational Economics ① 第 4 回: Clinical Papers in Organizational Economics ② 第 5 回: Experimental Organizational Economics ① 第 6 回: Experimental Organizational Economics ② 第 7 回: Insider Econometrics ① 第 8 回: Insider Econometrics ② 第 9 回: Personnel Economics ① 第 10 回: Personnel Economics ② 第 11 回: Incentives in Hierarchies ① 第 12 回: Incentives in Hierarchies ② 第 13 回: Theory and Evidence in Internal Labor Markets ① 第 14 回: Theory and Evidence in Internal Labor Markets ② 第 15 回: まとめ	
【評価方法】	授業回ごとの発表内容(50%)、最終レポートの内容(50%)	
【テキスト】	Robert Gibbons and John Roberts , The Handbook of Organizational Economics, Princeton Univ Press, 2012. の Part I から PartIVの部分	
【参考書】		
【備考】	特になし	
【社会人聴講生】		【科目等履修生】

【科目名】	特殊演習 II	Special Seminar II
【開講時期】	2024 年度前期	
【科目責任者】		
【担当教員】	*小西 敦	
【授業の目的・方法】	<p>本演習は博士論文作成にとって必要な研究方法の理解とテーマに関する知見の習得を目的とします。そのため、次のことを行うことによって、受講者が選んだテーマに関する研究能力を高めます。</p> <p>第 1 に、テーマに関する先行研究を選択し、それらの学術的貢献及び問題点を検討します。</p> <p>第 2 に、我が国におけるテーマに関する制度の変遷を整理し、制度の内容とその導入や変化の理由を実証的に把握します。</p> <p>第 3 に、我が国の中央政府及び地方政府における上記の制度の運用状況を分析し、その成果と課題を検討します。</p> <p>第 4 に、テーマに関する諸外国の制度を検討します。</p> <p>本演習では、原則として、各回において、事前課題についての発表を行ってまいります。</p> <p>なお、テーマは、政策評価以外の公共政策論や地方自治論上のテーマを予定しています。テーマ調整などがありますので、本演習の履修を希望する場合には、事前に担当教員に連絡してください。</p> <p>本演習の実施方法や日程も、履修者と相談の上、決定しますので、履修希望者は、上記の履修前の連絡を必ずしてください。</p>	
【到達目標】	<p>自らで研究上の問を立て、それに関する先行研究を踏まえた考察を行い、問いに対する自分なりの答えを出し、以上の過程を言語化し、博士論文を構成する論文を 1 本以上、書けるようになること。</p>	
【準備学習】	<p>各回に事前に指定した文献を読んで、それに対する自分の見解を、授業中に発表できる形で準備すること。授業終了後、授業中の気づき等を踏まえて、自分の見解を見直し、精緻化すること。</p>	
【授業展開】	<p>下記の日程については、履修者と相談の上、変更があり得ます。</p> <p>第 1 回: ガイダンス: 研究テーマ及び本演習の進め方の説明</p> <p>第 2 回: テーマの概念: テーマに関する基本的な概念の考察</p> <p>第 3 回: テーマに関する先行研究の検討その 1</p> <p>第 4 回: テーマに関する先行研究の検討その 2</p> <p>第 5 回: テーマに関する先行研究の検討その 3</p> <p>第 6 回: テーマに関する我が国の制度の検討その 1</p> <p>第 7 回: テーマに関する我が国の制度の検討その 2</p> <p>第 8 回: テーマに関する我が国の制度の検討その 3</p> <p>第 9 回: テーマに関する我が国の制度の運用の検討その 1</p> <p>第 10 回: テーマに関する我が国の制度の運用の検討その 2</p> <p>第 11 回: テーマに関する我が国の制度の運用の検討その 3</p> <p>第 12 回: テーマに関する諸外国の制度の検討その 1</p> <p>第 13 回: テーマに関する諸外国の制度の検討その 2</p> <p>第 14 回: テーマに関する制度の成果と課題</p> <p>第 15 回: まとめ</p>	
【評価方法】	授業回ごとの発表内容(4 割)、最終レポートの内容(6 割)。	
【テキスト】	授業中に指定します。	
【参考書】	<p>真淵勝(2020)『新版 行政学』有斐閣</p> <p>伊藤修一郎(2022)『政策リサーチ入門 増補版』東京大学出版会</p>	
【備考】	<p>学習内容に対する主体的な取り組みを期待します。</p> <p>国や自治体で政策立案・政策評価・予算編成等に携わった担当教員の行政実務経験を授業内容に反映するように努めます。</p>	
【社会人聴講生】	聴講可 (通常の履修学生と同様のレポート等による評価を受けること)	履修可 (通常の履修学生と同様のレポート等による評価を受けること)

【科目名】	特殊演習Ⅱ	Special Seminar II
【開講時期】	2024 年度前期	
【科目責任者】	木村 綾	
【担当教員】	木村 綾	
【授業の目的・方法】	<p>本演習は博士論文作成にとって必要な研究方法論および理論の習得を目指す。そこで福祉分野をはじめ、医療や看護など保健医療分野における研究方法や理論を理解し、議論を行う。特に、integrated care(統合ケア)、地域の専門職の連携機能の測定と評価を主題に、先行研究の把握と検討方法、概念および理論構築の仕方、データ構築手法、分析手法などの観点から、演習を行う。</p> <p>本演習では、履修生に内容を理解していることを確認するための発表を毎回課す。</p>	
【到達目標】	博士論文作成にとって必要な研究方法論および理論(福祉・保健医療領域)の習得	
【準備学習】		
【授業展開】	<p>第1回:イントロダクション 本演習の進め方に関する説明</p> <p>第2～5回:integrated care 理論 integrated care の定義や概念モデル、測定や評価について(文献レビュー、ディスカッション)</p> <p>第6～10回:保健・医療・福祉における多職種連携 他職種連携に関する研究の動向 他職種連携のプロセス、要因、効果(文献レビュー、ディスカッション)</p> <p>第11～14回:他職種連携の評価 評価に関する研究の動向、評価尺度の開発(文献レビュー、ディスカッション)</p> <p>第15回:まとめ</p>	
【評価方法】	授業回ごとの発表内容(40%)、最終レポートの内容(60%)	
【テキスト】	適宜資料は用意する。	
【参考書】		
【備考】		
【社会人聴講生】	不可	【科目等履修生】 不可

【科目名】	特殊演習Ⅱ	Special Seminar II
【開講時期】	2024 年度前期	
【科目責任者】	大久保 あかね	
【担当教員】	大久保 あかね	
【授業の目的・方法】	<p>本演習は、博士論文作成を指導するものである。したがって、博士論文作成に必要な先行研究のレビューから研究計画、調査方法の選定など論文作成の基礎の習得を目指す。</p> <p>研究テーマは、人々の観光行動から、地域における観光を核としたまちづくりに至るまで、広く観光をキーワードとした社会現象を想定し、観光学にかかわる専門的な研究方法を応用する。</p> <p>講義の中で観光調査などフィールドワークを実施し、地域課題に実践的に取り組むものとする。</p>	
【到達目標】	博士論文執筆の準備、また具体的な調査計画を立てる。	
【準備学習】	日常的に参考文献、先行研究、海外ジャーナルなどを閲覧する習慣をつける。	
【授業展開】	<p>第1回:オリエンテーション</p> <p>第2回:地域課題における観光の役割(1) 観光事象の歴史の変遷から</p> <p>第3回:地域課題における観光の役割(2) 既存観光地における資源活用</p> <p>第4回:地域課題における観光の役割(3) 「観光地化」への期待</p> <p>第5回:観光研究の方法論(1) 観光への様々な研究アプローチ</p> <p>第6回:観光研究の方法論(2) 定性的データの取得方法と分析</p> <p>第7回:観光研究の方法論(3) 定量的データの取得方法と分析</p> <p>第8回:観光研究の方法論(4) 観光調査の設計と分析</p> <p>第9回:地域課題に対する観光調査の実践(1) 研究対象地の選定と基礎調査</p> <p>第10回:地域課題に対する観光調査の実践(2) 調査方法の検討と調査ツールの作成</p> <p>第11回:地域課題に対する観光調査の実践(3) 予備調査の分析と本調査の企画</p> <p>第12回:地域課題に対する観光調査の実践(4) 本調査</p> <p>第13回:地域課題に対する観光調査の実践(5) 調査データの分析と考察</p> <p>第14回:地域課題に対する観光調査の実践(5) 調査データの活用</p> <p>第15回:まとめ</p>	
【評価方法】	授業回ごとの発表内容(50%)、最終レポートの内容(50%)	
【テキスト】	講義ごとに指定する	
【参考書】	研究の進捗状況に合わせて、適宜提示する。	
【備考】	調査等でフィールドワークを行うので、必ず参加すること。	
【社会人聴講生】	不可	【科目等履修生】 不可

【科目名】	特殊演習Ⅱ	Special Seminar II
【開講時期】	2024 年度前期	
【科目責任者】	*松岡 清志	
【担当教員】	*松岡 清志	
【授業の目的・方法】	<p>政策科学は政治学、行政学、経済学をはじめとする学際的要素の強い学問です。それゆえ、政策分析に主眼を置く博士論文を執筆する際には、多様なアプローチの中からどれが最も適するかを比較考量することが重要です。本講義は、その前提となる視座や理論枠組みを身につけることを目的とします。</p> <p>講義の前半は、毎回1～2名を報告者として割り当て、文献の該当部分に関する報告を行い、報告者より示された疑問点やディスカッションポイントについて、受講者相互の議論および担当教員の解説を交える形で進めます。その後、前半で学んだ視座や理論枠組みをご自身の研究にどう活かすかを報告していただきます。</p>	
【到達目標】	政策分析における視座および理論枠組みを多角的に整理し、様々なアプローチを組み合わせた博士論文を執筆できるようになることを目標とします。	
【準備学習】	受講前に文献の該当箇所を読んだうえで、疑問点およびディスカッションで取り上げるテーマについて整理しておくことが求められます(運営上の観点から報告者を毎回1～2名割り当てますが、上記準備は報告者以外も同様です)。受講後には、関連する文献の参照、国内外の事例の探索を積極的に行ってください。	
【授業展開】	<p>第1回 イン트로ダクションおよび報告者の決定</p> <p>第2回 概念および研究領域としての公共政策とは何か</p> <p>第3回 政治と政策の関係</p> <p>第4回 政策に影響を及ぼす存在:アクターと制度</p> <p>第5回 政策デザイン</p> <p>第6回 政策過程(1)</p> <p>第7回 政策過程(2)</p> <p>第8回 多様な政策分析手法</p> <p>第9回 政策評価:インパクト分析とプログラム評価</p> <p>第10回 政策実施</p> <p>第11回 政策研究の新たな方向性</p> <p>第12回 政策科学の展望</p> <p>第13回 政策科学の活用(1)</p> <p>第14回 政策科学の活用(2)</p> <p>第15回 総括</p>	
【評価方法】	講義における報告と討論への参加(60%)、レポート結果(40%)から総合的に評価いたします。	
【テキスト】	受講者との協議によって決定いたしますが、現時点では、Kevin B. Smith, Christopher Larimer, "The Public Policy Theory Primer(3rd edition)", Routledge, 2017を予定しています。	
【参考書】	<p>秋吉貴雄・伊藤修一郎・北山俊哉『公共政策学の基礎(第3版)』有斐閣、2020。</p> <p>北山俊哉・稲継裕昭(編)『テキストブック地方自治(第3版)』東洋経済新報社、2021。</p> <p>西岡晋・廣川嘉裕(編)『行政学』文眞堂、2021。</p> <p>若林恵(責任編集)『NEXT GENERATION GOVERNMENT 次世代ガバメント 小さくて大きい政府のつくり方』日本経済新聞出版、2019。</p> <p>ザビーネ＝クールマン・ヘルムート＝ヴォルマン(著)、縣公一郎・久邇良子・岡本三彦・宇野二郎(訳)『比較行政学入門－ヨーロッパ行政改革の動向－』成文堂、2021。</p> <p>その他、講義中にご紹介いたします。</p>	
【備考】	担当者は、2020年度までデジタル・ガバメントに関する研究機関に在籍し、国および地方自治体におけるデジタル技術の活用、公共サービス提供における行政と民間および個人の協働などについて研究を行うとともに、行政機関の先行事例に関する調査やガイドライン作成の支援を行った経験を有しております。本講義では、公共政策および公共サービスに関する最近の動向についても解説する予定です。	
【社会人聴講生】	可能です。但し、評価方法につきましては同一の条件となりますのでご了承ください。	【科目等履修生】 可能です。但し、評価方法につきましては同一の条件となりますのでご了承ください。

【科目名】	特殊演習Ⅱ	Special SeminarⅡ
【開講時期】	2024年度前期	
【科目責任者】		
【担当教員】	内海 佐和子	
【授業の目的・方法】	指導教員の指導のもと、博士研究を進める	
【到達目標】		
【準備学習】		
【授業展開】	第1回:オリエンテーション 第2回以降は履修者と相談のうえ、進める よって、第1回は必ず出席すること	
【評価方法】	博士研究の進捗状況や報告内容により総合的に評価する	
【テキスト】	なし	
【参考書】	必要に応じて、適宜、紹介する	
【備考】	原則として対面で、ディスカッションを中心に行う	
【社会人聴講生】	不可	【科目等履修生】 不可

【科目名】	特殊演習 II	Special Seminar II
【開講時期】	2024 年度前期	
【科目責任者】	井本 智明	
【担当教員】	井本 智明	
【授業の目的・方法】	<p>本演習は博士論文作成にとって必要なスキルの習得を目指す。</p> <p>幾何学的な性質を有したデータに対する分析について、特に円周上や球面上のデータような例を序論的に学び、そこからさらに文献を選択して幾何学的な性質を有したデータ分析特有の技法を学び、研究・討論を行う。</p> <p>本演習では、履修生に内容を理解していることを確認するための発表を、実習の回以外では毎回課す。</p>	
【到達目標】	博士論文作成にとって必要なスキル、特に幾何学的な性質を持つデータの処理技術を身につける。	
【準備学習】	<ul style="list-style-type: none"> ・前回講義の復習 ・次回講義での発表のための準備 	
【授業展開】	<p>第1回： Statistical Shape Analysis の概要</p> <p>第2回： Directional Statistics から Statistical Shape Analysis への歴史的展開</p> <p>第 1, 2 回で、幾何学的な性質を有したデータに関する必要な概念とその歴史的展開を俯瞰する。</p> <p>第3回： Directional Statistics における円周上データの理論（文献購読）</p> <p>第4回： Directional Statistics における円周上データの理論（文献購読、討論）</p> <p>第5回： Directional Statistics における円周上データの理論（文献購読、討論）</p> <p>第6回： Directional Statistics における円周上データの理論（応用についての討論）</p> <p>第3～6回で、Statistical Shape Analysis の典型的な例の 1 つである Directional Statistics の話題を取り上げ、その理論について習得する。</p> <p>第7回： Directional Statistics における球面上データの理論（文献購読）</p> <p>第8回： Directional Statistics における球面上データの理論（文献購読、討論）</p> <p>第9回： Directional Statistics における球面上データの理論（文献購読、討論）</p> <p>第 10 回： Directional Statistics における球面上データの理論（応用についての討論）</p> <p>第7～10 回で、円周上データ分析を拡張した球面上データ分析の話題を取り上げ、その基礎と理論について習得する。</p> <p>第 11 回： Statistical Shape Analysis における基礎（文献購読）</p> <p>第 12 回： Statistical Shape Analysis における基礎（文献購読、討論）</p> <p>第 13 回： Statistical Shape Analysis における基礎（文献購読、討論）</p> <p>第 14 回： Statistical Shape Analysis における基礎（応用についての討論）</p> <p>第 11～14 回で、Statistical Shape Analysis について習得し、様々な種類のデータ処理法について習得する。</p>	
【評価方法】	授業回ごとの発表、実習内容（50%）、最終レポート（50%）	
【テキスト】	授業時に選択する。	
【参考書】	<p>Mardia, K.V. and Jupp, P.E. (2000) Directional Statistics. John Wiley & Sons, London</p> <p>Dryden, I.L. and Mardia, K.V. (2016) Statistical Shape Analysis: With Applications in R, 2nd Edition. John Wiley & Sons, London.</p>	
【備考】	なし	
【社会人聴講生】	聴講不可	【科目等履修生】 聴講不可

【科目名】	研究指導 I	Special Lecture I
【開講時期】	2024 年度前期、2024 年度後期	
【科目責任者】	武藤 伸明	
【担当教員】	武藤 伸明	
【授業の目的・方法】	学生が、グラフ論、組合せ論などの分野におけるコンピュータを活用した高度な研究を行うために必要な知識、方法論、スキルを習得し、自らの研究テーマを確立することを目的とする。	
【到達目標】	グラフ論、組合せ論などの分野における現代的な知識、方法論、スキルを習得すること。 研究テーマを確立し、目的、手法、スケジュールなど策定すること。	
【準備学習】	予習: 文献を読み、内容の概略を理解すること。 復習: 練習問題、研究の試行などを通じて理解を深めること。	
【授業展開】	1-5 回目: 研究分野の概要と方法論の理解 6-10 回目: 関連する知識、技術の調査 11-15 回目: 要素技術に関する探求 16-20 回目: 研究テーマの確率 21-25 回目: 研究目的、手法、スケジュールの作成 26-30 回目: 研究の開始	
【評価方法】	文献の理解 (50%)、研究の遂行 (50%) に基づいて評価する。	
【テキスト】	授業時に適宜指示する。	
【参考書】	授業時に適宜指示する。	
【備考】		
【社会人聴講生】	不可	【科目等履修生】 不可

【科目名】	研究指導 I	Special Lecture I
【開講時期】	2024 年度前期、2024 年度後期	
【科目責任者】	岩崎 邦彦	
【担当教員】	岩崎 邦彦	
【授業の目的・方法】	マーケティングにおける高度な研究を行うために必要なスキルと方法論と思考方法を、博士後期課程の学生が習得することを目的とする。 講義、ケーススタディ、実践的な研究プロジェクトを通じて学ぶ。	
【到達目標】	マーケティング研究の理論と応用、現在の動向を理解する。	
【準備学習】	受講生は、マーケティング研究の出版物をレビューし、さまざまな研究方法論を理解することが求められる。各クラスに先立ち、各回の議論のトピックに関連した文献の講読を行う。	
【授業展開】	1～2 研究の基礎 研究の意義、目的、哲学 学術研究の倫理と規範 文献レビューの方法と情報源の活用 研究課題の特定と仮説の立案 3～4 マーケティングリサーチの基礎：質的研究と量的研究の概要 量的研究方法 データ収集方法：調査法、実験法 データ分析の基本：記述統計と推測統計 5～6 量的研究のレビュー作成 7～8 量的研究の論文作成とレビュー 9～10 質的研究方法 インタビュー、フォーカスグループ ケーススタディ、内容分析 信頼性と妥当性の確保 質的研究の論文レビュー作成 11～12 マーケティングにおける研究領域 13～14 応用研究 スモールビジネス・マーケティング ブランディング研究 農業マーケティング 観光マーケティング 医療マーケティング 15 総括	
【評価方法】	ディスカッションへの参加度(30%)、作成した資料およびプレゼンテーション(30%)、レポート・論文(40%)に基づいて評価する。	
【テキスト】	授業時に案内をする。	
【参考書】		
【備考】		
【社会人聴講生】		【科目等履修生】

【科目名】	研究指導 I	Special Lecture I
【開講時期】	2024 年度前期、2024 年度後期	
【科目責任者】	岸 昭雄	
【担当教員】	岸 昭雄	
【授業の目的・方法】	公共政策に関する高度な研究を行うために必要な知識やスキル、方法論を、博士後期課程の学生に身につけさせることを目的とする。 講義、ケーススタディ、ディスカッション等を通じて教授する。	
【到達目標】	公共政策に関する基礎理論と現在の動向を理解し、研究遂行能力を身につける。	
【準備学習】	学生は現代社会の現状について正しく詳細に理解し、直面している社会の問題について把握していることが要求される。	
【授業展開】	1-10 回目：研究の基礎 研究の意義、目的設定の方法、先行研究のレビュー等の方法論について議論する 11-20 回目：研究手法 データ収集、インタビュー調査等の研究手法について議論する 21-30 回目：研究のまとめ 研究成果の記述方法、発表方法について議論する	
【評価方法】	ディスカッションへの貢献度、作成した資料やプレゼンテーションから総合的に評価する	
【テキスト】	指導の中で提示する	
【参考書】	指導の中で提示する	
【備考】	特に無し	
【社会人聴講生】	不可	【科目等履修生】 不可

【科目名】	研究指導 I	Special Lecture I
【開講時期】	2024 年度前期、2024 年度後期	
【科目責任者】	東野定律	
【担当教員】	東野定律	
【授業の目的・方法】	<p>博士課程 3 年間で博士論文を構成する論文を 2 本以上作成し、論文の審査及び試験に合格するために必要な下記の専門的知識及び能力を獲得することを目的とする。</p> <p>(1)研究テーマとなる内容に深い関わりをもちつつ、医療、介護をはじめとする研究において、自己の研究に必要な高度な専門的知識。</p> <p>(2)現代における課題を的確に発見・把握し、課題を学術的方法で解決する能力。</p> <p>方法は、先行研究のレビュー、関係データの収集・分析、論文執筆指導の受講等により行います。 授業形態は、受講者と担当教員が相談の上、決定します。</p>	
【到達目標】	博士論文を構成する個々の論文・報告書等(以下「論文等」という)を2本以上作成し、査読等を経て、学会誌等に掲載し、公表すること。	
【準備学習】	授業前に、指定する文献等を読み、又は指定する論文等を作成すること。	
【授業展開】	<p>下記内容を基本とし、進捗に応じて履修者と相談の上進めていく。</p> <p>第 1 回～第 3 回 研究スケジュール及び博士論文の全体構成案の修正 第 4 回～第 8 回 博士論文構成論文等の作成・投稿 第 9 回～第 13 回 博士論文構成論文等の作成・投稿 第 14 回～第 18 回 博士論文構成論文等の作成・投稿 第 19 回～第 21 回 博士論文全体の再検討 第 22 回～第 25 回 博士論文中間報告の準備 第 26 回～第 30 回 博士論文全体の修正</p>	
【評価方法】	進捗を含め博士論文構成論文等の内容(6 割)及び報告(4 割)によって評価します。	
【テキスト】	別途必要に応じて指定する。	
【参考書】	別途必要に応じて指定する。	
【備考】		
【社会人聴講生】	不可	【科目等履修生】 不可

【科目名】	研究指導 I	Special Lecture I
【開講時期】	2024 年度前期、2024 年度後期	
【科目責任者】	竹下誠二郎	
【担当教員】	竹下誠二郎	
【授業の目的・方法】	<p>本演習は、博士論文にとって必要な研究方法論および理論の習得を目指す。</p> <p>競争するリベラル型と非リベラル型資本主義を基とするガバナンス形式を比較し、企業・組織がとる行動原理とその戦略に関する研究能力を高める。ガバナンスのコンバージェンスの度合い、また異なったガバナンスのハイブリッド化の可能性も分析する。各ガバナンスのイノベーションへの取り組みなど、これらガバナンス形式がマネジメントに与えるインプリケーションも考察する。構造的なアングルからも分析を行い、個人重視の文化においてはエージェンシー理論に向かう傾向が強く、集団主義重視の文化においてはステュワードシップ理論へ傾斜するメカニズムも把握する。</p> <p>本演習では、履修生に内容を理解していることを確認するための発表を毎回課す。</p>	
【到達目標】	<p>本演習は、博士論文にとって必要な研究方法論および理論の習得を目指す。</p> <p>競争するリベラル型と非リベラル型資本主義を基とするガバナンス形式を比較し、企業・組織がとる行動原理とその戦略に関する研究能力を高める。ガバナンスのコンバージェンスの度合い、また異なったガバナンスのハイブリッド化の可能性も分析する。各ガバナンスのイノベーションへの取り組みなど、これらガバナンス形式がマネジメントに与えるインプリケーションも考察する。構造的なアングルからも分析を行い、個人重視の文化においてはエージェンシー理論に向</p>	
【準備学習】	事前に配られた参考文献・資料に目を通しておくこと	
【授業展開】	<p>第 1 回: イントロダクション 序論・予備的解説、またコースの概略・目的など。</p> <p>第 2 回: リベラル型資本主義とそのガバナンスのマネジメント(1) リベラル型から派生する組織形態の強み、そしてそのスタイルを把握する。</p> <p>第 3 回: リベラル型資本主義とそのガバナンスのマネジメント(2) 不平等や格差などの社会的コストに焦点を当て、リベラル型の弱みを把握する。</p> <p>第 4 回: 非リベラル型資本主義とそのガバナンスのマネジメント(1) 非リベラル型から派生する組織形態の強み、そしてそのスタイルを把握する。</p> <p>第 5 回: 非リベラル型資本主義とそのガバナンス形式(2) 順応度の低さ、バンキング・ガバナンスの功罪について考える。</p> <p>第 6 回: イノベーションとガバナンス 各ガバナンス下におけるイノベーションのマネジメントについて考察する。</p> <p>第 7 回: アントルプルナーシップ なぜアントルプルナーシップがリベラル型で成功しているのかを考察する。</p> <p>第 8 回: グローバル化にともなうコンバージェンスの動き ガバナンスのコンバージェンス(収斂)の動きについて考察する。</p> <p>第 9 回: 経営・組織文化の国際比較 各ガバナンスの背景にある経営における組織文化の許容度を比較分析する。</p> <p>第 10 回: 抵抗と反発 異なるガバナンスのコンバージェンスに対する抵抗とそのプロセスを分析する。</p> <p>第 11 回: ハイブリッド化 ガバナンスのハイブリッド化についての分析を行う。</p> <p>第 12 回: リーダーシップ グローバル化、コンバージェンスの動き、ハイブリッド化などの環境下におけるリーダーのマネジメントについて考査する。</p> <p>第 13 回: MNE が遭遇するチャレンジと機会 多国籍企業が遭遇するチャレンジと機会をガバナンスの変遷から探る。</p> <p>第 14 回: ステュワードシップ・コードに向けて 日本のステュワードシップ導入の長期インプリケーションについて考える。</p> <p>第 15 回: まとめ</p>	

【評価方法】	授業ごとの発表(50%)、レポート(50%)		
【テキスト】	適宜教員が資料を配布・指示する。		
【参考書】	(1) Berger, Suzanne, and Ronald Dore, Ronald (eds.) (1996), National Diversity and Global Capitalism, Cornell University Press, Ithaca (2) Streeck, Wolfgang, and Yamamura, Kozo (eds.) (2003), The End of Diversity? Prospects for German and Japanese Capitalism, Cornell University Press, Ithaca (3) 吉田和男著「日本型経営システムの功罪」東洋経済新報社 (4) Berggren, Christian, and Nomura, Masami (1997), The Resilience of Corporate Japan, Paul Chapman Publishing Ltd, London		
【備考】	特になし		
【社会人聴講生】	可	【科目等履修生】	可

【科目名】	研究指導 I	Special Lecture I
【開講時期】	2024 年度前期、2024 年度後期	
【科目責任者】		
【担当教員】	上原 克仁	
【授業の目的・方法】	博士論文を執筆するために必要な専門的知識および能力を獲得することを目的とする。	
【到達目標】	博士論文を構成する論文を執筆し、学会での報告、学会誌等へ投稿、掲載されることを目指す。	
【準備学習】	自ら積極的に研究に臨み、論文を執筆する。	
【授業展開】	<p>受講者と相談の上決定するが、おおよそは以下の通りである。</p> <p>第 1 回～第 3 回 研究スケジュールおよび博士論文のテーマの検討</p> <p>第 4 回～第 5 回 博士論文の全体構成案の検討</p> <p>第 6 回～第 14 回 先行研究のレビュー、調査、分析、執筆</p> <p>第 15 回～第 17 回 学会発表に向けた準備</p> <p>第 18 回～第 26 回 先行研究のレビュー、調査、分析、執筆</p> <p>第 27 回～第 28 回 学会発表に向けた準備</p> <p>第 29 回～第 30 回 投稿に向けた準備、投稿</p>	
【評価方法】	執筆した論文の質に基づき評価する。	
【テキスト】	別途指示する。	
【参考書】	別途指示する。	
【備考】	特になし。	
【社会人聴講生】	受け入れ不可。	【科目等履修生】 受け入れ不可。

【科目名】	研究指導 I	Special Lecture I
【開講時期】	2024 年度前期、2024 年度後期	
【科目責任者】		
【担当教員】	*小西 敦	
【授業の目的・方法】	<p>博士論文を構成する論文を 2 本程度作成し、論文の審査及び試験に合格するために必要な下記の専門的知識及び能力を獲得することを目的とします。</p> <p>(1)政策学に深い関わりをもちつつ、経営学の要素も含む研究において、自己の専門分野に関する高度な専門的知識。</p> <p>(2)現代の地域社会における課題を的確に発見・把握し、課題を学術的方法で解決する能力。</p> <p>方法は、先行研究のレビュー、関係データの収集・分析、論文執筆等により行います。 授業形態は、受講者と担当教員が相談の上、決定します。</p>	
【到達目標】	博士論文を構成する論文や報告書等(以下「論文等」という)を 2 本程度作成し、査読等を経て、学会誌等に掲載し、公表すること。	
【準備学習】	授業前に、指定する文献等を読み、又は指定する論文等を作成すること。	
【授業展開】	<p>下記の日程については、履修者と相談の上、変更があり得ます。</p> <p>第 1 回～第 3 回 研究スケジュール及び博士論文のメインテーマの決定 第 4 回～第 5 回 博士論文の全体構成案の作成 第 6 回～第 13 回 先行研究のレビュー 第 14 回～第 18 回 博士論文構成論文等 A の作成・投稿・公表 第 19 回～第 21 回 博士論文構成論文等 B の作成・投稿・公表 第 22 回～第 25 回 博士論文構成論文等 A の再検討 第 26 回～第 30 回 博士論文構成論文等 B 及び博士論文全体構成の再検討</p>	
【評価方法】	博士論文構成論文等の内容(7 割)及び報告(3 割)によって評価します。	
【テキスト】	授業中に指定します。	
【参考書】	授業中に指定します。	
【備考】	国や自治体で政策立案・政策評価・予算編成等に携わった担当教員の行政実務経験を授業内容に反映するように努めます。	
【社会人聴講生】	不可	【科目等履修生】 不可

【科目名】	研究指導 I	Special Lecture I
【開講時期】	2024 年度前期、2024 年度後期	
【科目責任者】		
【担当教員】	* 六井 淳	
【授業の目的・方法】	人工知能関連研究を実施するために必要な高度な知識とスキルを身に付けることを目的とし、最新研究のサーベイ、人工知能関連の高度な知識とスキルの習得、調査・研究内容のプレゼンテーションを通じて教授する。	
【到達目標】	人工知能関連の最新研究動向を理解し、自身の研究の進捗に活かす方法を理解する	
【準備学習】	IEEE Xplorer の最新研究論文のサーベイ、及び、理論を駆使した研究実施方法の習得	
【授業展開】	1～5 回 : 基礎理論(確率統計、回帰分析、パターン認識) 6～10 回 : 応用理論(時系列分析、深層学習、強化学習) 11～15 回 : 最新研究に関するサーベイとその報告 16 回～20 回 : 新規研究計画の策定と研究の信頼性、妥当性の検討 21 回～25 回 : 研究の実施、ディスカッション、投稿論文プロセスの理解と準備 25～30 回 : 論文の執筆と研究成果の発信	
【評価方法】	理論の理解度(30%)、最新研究調査と研究計画の妥当性(30%)、論文評価(40%)の合計点数によって評価する。	
【テキスト】		
【参考書】		
【備考】		
【社会人聴講生】		【科目等履修生】

【科目名】	研究指導 I	Special Lecture I
【開講時期】	2024 年度前期、2024 年度後期	
【科目責任者】	大久保あかね	
【担当教員】	大久保あかね	
【授業の目的・方法】	観光学の分野で高度な研究を行うために必要なスキルと方法論を、博士後期課程の学生に装備させることを目的とする。 講義、ケーススタディ、フィールドワーク、インタラクティブなセミナー、実践的な研究プロジェクトを通じて教授する。	
【到達目標】	観光学研究の基礎理論と現在の動向を理解する。	
【準備学習】	日常的に観光学の先行研究、海外ジャーナル等の出版物をレビューし、様々な研究方法論になれることが要求される。 各クラスに先立ち、議論のトピックに関連したテキストと研究を読み、準備して臨むこと。	
【授業展開】	<p>1－5 回目：研究の基礎</p> <p>研究の意義、目的、哲学</p> <p>学術研究の論理と規範</p> <p>文献レビューの方法と情報源の活用</p> <p>研究課題の特定と仮設の立案</p> <p>研究設計の基礎：質的手研究と量的研究の概要</p> <p>6－10 回目：量的研究方法</p> <p>データ収集方法：調査法、実験法</p> <p>データ分析の基本：記述統計と推測統計</p> <p>量的研究のレビュー作成</p> <p>量的研究の論文作成とレビュー</p> <p>11－15 回目：質的研究方法</p> <p>インタビュー、フォーカスグループ</p> <p>ケーススタディ、内容分析</p> <p>信頼性と妥当性の確保</p> <p>質的研究のレビュー作成</p> <p>質的研究の論文作成とレビュー</p> <p>16－20 回目：観光学における研究領域</p> <p>国際観光、観光政策、観光教育</p> <p>コンテンツ・ツーリズム、</p> <p>地域デザイン 等</p> <p>各分野の学会誌レビュー</p> <p>21－25 回目：研究デザインの作成</p> <p>研究プロポーザルの作成</p> <p>研究データ収集と分析計画</p> <p>研究結果の解釈と報告</p> <p>学術誌への投稿準備</p> <p>26－30 回目：研究と発表</p> <p>独自の研究テーマの開発</p> <p>研究プロジェクトのプレゼンテーションとディスカッション</p> <p>提出論文の執筆と修正</p> <p>学会発表の準備</p> <p>研究成果の発信</p>	
【評価方法】	ディスカッションへの参加度 (30%)、作成した資料及びプレゼンテーション (30%) 提出した論文 (40%) に基づいて評価する。	
【テキスト】	適宜、提示する。	
【参考書】	適宜、提示する。	
【備考】	特になし。	

【社会人聴講生】	不可	【科目等履修生】	不可
----------	----	----------	----

【科目名】	研究指導 I	Special Lecture I
【開講時期】	2024 年度前期、2024 年度後期	
【科目責任者】		
【担当教員】	内海 佐和子	
【授業の目的・方法】	<ul style="list-style-type: none"> ・指導教員と相談のうえ、博士研究の研究計画を立てる ・博士論文を構成する査読付き論文を通す ・授業は対面で行う 	
【到達目標】		
【準備学習】	主体的、計画的に博士研究を進める	
【授業展開】	第 1 回:ガイダンス 第 2 回以降は履修者と相談のうえ、進める	
【評価方法】	博士研究の進捗状況、査読論文の採用状況などにより総合的に評価する	
【テキスト】	なし	
【参考書】	必要に応じ、講義中に適宜、紹介する	
【備考】		
【社会人聴講生】	不可	【科目等履修生】 不可

【科目名】	研究指導Ⅱ	Special LectureⅡ
【開講時期】	2024年度前期、2024年度後期	
【科目責任者】	武藤 伸明	
【担当教員】	武藤 伸明	
【授業の目的・方法】	学生が、グラフ論、組合せ論などの分野におけるコンピュータを活用した高度な研究を実施し、投稿論文を執筆することを目的とする。	
【到達目標】	グラフ論、組合せ論などの分野における研究を推進すること。 投稿論文を作成すること。	
【準備学習】	予習: 研究を実施し、報告できる形にまとめること。 復習: 研究の改善点について考察し、研究を進化させること。	
【授業展開】	1-5 回目: 研究の実施 6-10 回目: 投稿論文の骨子の作成 11-15 回目: 投稿論文の骨子に基づく研究の深化 16-20 回目: 論文投稿 21-25 回目: 研究内容の振り返りと課題抽出 26-30 回目: 第2投稿論文のテーマの策定	
【評価方法】	研究の遂行 (50%)、論文の執筆 (50%) に基づいて評価する。	
【テキスト】	授業時に適宜指示する。	
【参考書】	授業時に適宜指示する。	
【備考】		
【社会人聴講生】	不可	【科目等履修生】 不可

【科目名】	研究指導Ⅱ	Special LectureⅡ
【開講時期】	2024年度前期、2024年度後期	
【科目責任者】	岸 昭雄	
【担当教員】	岸 昭雄	
【授業の目的・方法】	公共政策に関する高度な研究を行うために必要な知識やスキル、方法論を、博士後期課程の学生に身につけさせることを目的とする。 講義、ケーススタディ、ディスカッション等を通じて教授する。	
【到達目標】	公共政策に関する基礎理論と現在の動向を理解し、研究遂行能力を身につける。	
【準備学習】	学生は現代社会の現状について正しく詳細に理解し、直面している社会の問題について把握していることが要求される。	
【授業展開】	1-10 回目：研究の基礎 研究の意義、目的設定の方法、先行研究のレビュー等の方法論について議論する 11-20 回目：研究手法 データ収集、インタビュー調査等の研究手法について議論する 21-30 回目：研究のまとめ 研究成果の記述方法、発表方法について議論する	
【評価方法】	ディスカッションへの貢献度、作成した資料やプレゼンテーションから総合的に評価する	
【テキスト】	指導の中で提示する	
【参考書】	指導の中で提示する	
【備考】	特に無し	
【社会人聴講生】	不可	【科目等履修生】 不可

【科目名】	研究指導Ⅱ	Special LectureⅡ
【開講時期】	2024年度前期、2024年度後期	
【科目責任者】	東野定律	
【担当教員】	東野定律	
【授業の目的・方法】	<p>博士課程3年間で博士論文を構成する論文を2本以上作成し、論文の審査及び試験に合格するために必要な下記の専門的知識及び能力を獲得することを目的とする。</p> <p>(1)研究テーマとなる内容に深い関わりをもちつつ、医療、介護をはじめとする研究において、自己の研究に必要な高度な専門的知識。</p> <p>(2)現代における課題を的確に発見・把握し、課題を学術的方法で解決する能力。</p> <p>方法は、先行研究のレビュー、関係データの収集・分析、論文執筆指導の受講等により行います。 授業形態は、受講者と担当教員が相談の上、決定します。</p>	
【到達目標】	博士論文を構成する個々の論文・報告書等(以下「論文等」という)を2本以上作成し、査読等を経て、学会誌等に掲載し、公表すること。	
【準備学習】	授業前に、指定する文献等を読み、又は指定する論文等を作成すること。	
【授業展開】	<p>下記内容を基本とし、進捗に応じて履修者と相談の上進めていく。</p> <p>第1回～第3回 研究スケジュール及び博士論文の全体構成案の修正 第4回～第8回 博士論文構成論文等の作成・投稿 第9回～第13回 博士論文構成論文等の作成・投稿 第14回～第18回 博士論文構成論文等の作成・投稿 第19回～第21回 博士論文全体の再検討 第22回～第25回 博士論文中間報告の準備 第26回～第30回 博士論文全体の修正</p>	
【評価方法】	進捗を含め博士論文構成論文等の内容(6割)及び報告(4割)によって評価します。	
【テキスト】	別途必要に応じて指定する。	
【参考書】	別途必要に応じて指定する。	
【備考】		
【社会人聴講生】	不可	【科目等履修生】 不可

【科目名】	研究指導Ⅱ	Special LectureⅡ
【開講時期】	2024年度前期、2024年度後期	
【科目責任者】		
【担当教員】	上原 克仁	
【授業の目的・方法】	博士論文を執筆し、論文の審査に合格するための専門的知識及び能力を獲得することを目的とする。	
【到達目標】	論文を執筆し学会で報告、学会誌に投稿し、掲載されること。	
【準備学習】	自ら進んで先行研究にあたり、論文を執筆すること。	
【授業展開】	<p>受講者と相談の上決めるが、おおよそは下記のとおりである。</p> <p>第1回～第3回 今年度の研究スケジュールの作成および博士論文の全体構成の検討</p> <p>第4回～第10回 調査、分析、論文の執筆</p> <p>第11回～第13回 学会発表に向けた準備</p> <p>第14回～第15回 投稿に向けた論文の修正、投稿</p> <p>第16回～第22回 調査、分析、論文の執筆</p> <p>第23回～第25回 学会発表に向けた準備</p> <p>第26回～第27回 投稿に向けた論文の修正、投稿</p> <p>第28回～第30回 博士論文の執筆</p>	
【評価方法】	論文の執筆、学会発表、学会誌への投稿状況に基づき評価する。	
【テキスト】	別途指示する。	
【参考書】	別途指示する。	
【備考】	特になし。	
【社会人聴講生】	受け入れ不可。	【科目等履修生】 受け入れ不可。

【科目名】	研究指導Ⅱ	Special LectureⅡ
【開講時期】	2024年度前期、2024年度後期	
【科目責任者】		
【担当教員】	*小西 敦	
【授業の目的・方法】	<p>博士論文を構成する論文を3本程度作成し、論文の審査及び試験に合格するために必要な下記の専門的知識及び能力を獲得することを目的とします。</p> <p>(1)政策学に深い関わりをもちつつ、経営学の要素も含む研究において、自己の専門分野に関する高度な専門的知識。</p> <p>(2)現代の地域社会における課題を的確に発見・把握し、課題を学術的方法で解決する能力。</p> <p>方法は、先行研究のレビュー、関係データの収集・分析、論文執筆指導の受講等により行います。授業形態は、受講者と担当教員が相談の上、決定します。</p>	
【到達目標】	博士論文を構成する個々の論文・報告書等(以下「論文等」という)を3本程度作成し、査読等を経て、学会誌等に掲載し、公表すること。	
【準備学習】	授業前に、指定する文献等を読み、又は指定する論文等を作成すること。	
【授業展開】	<p>下記の日程については、履修者と相談の上、変更があり得ます。</p> <p>第1回～第3回 研究スケジュール及び博士論文の全体構成案の修正</p> <p>第4回～第8回 博士論文構成論文等Cの作成・投稿</p> <p>第9回～第13回 博士論文構成論文等Dの作成・投稿</p> <p>第14回～第18回 博士論文構成論文等Eの作成・投稿</p> <p>第19回～第21回 博士論文全体の再検討</p> <p>第22回～第25回 博士論文中間報告の準備</p> <p>第26回～第30回 博士論文全体の修正</p>	
【評価方法】	博士論文構成論文等の内容(7割)及び報告(3割)によって評価します。	
【テキスト】	授業中に指定します。	
【参考書】	授業中に指定します。	
【備考】	国や自治体で政策立案・政策評価・予算編成等に携わった担当教員の行政実務経験を授業内容に反映するように努めます。	
【社会人聴講生】	不可	【科目等履修生】 不可

【科目名】	研究指導Ⅱ	Special LectureⅡ
【開講時期】	2024年度前期、2024年度後期	
【科目責任者】		
【担当教員】	* 六井 淳	
【授業の目的・方法】	人工知能関連研究を実施するために必要な高度な知識とスキルを身に付けることを目的とし、最新研究のサーベイ、人工知能関連の高度な知識とスキルの習得、調査・研究内容のプレゼンテーションを通じて教授する。	
【到達目標】	人工知能関連の最新研究動向を理解し、自身の研究の進捗に活かす方法を理解する	
【準備学習】	IEEE Xplorer の最新研究論文のサーベイ、及び、理論を駆使した研究実施方法の習得	
【授業展開】	1～5回：基礎理論(確率統計、回帰分析、パターン認識) 6～10回：応用理論(時系列分析、深層学習、強化学習) 11～15回：最新研究に関するサーベイとその報告 16回～20回：新規研究計画の策定と研究の信頼性、妥当性の検討 21回～25回：研究の実施、ディスカッション、投稿論文プロセスの理解と準備 25～30回：論文の執筆と研究成果の発信	
【評価方法】	理論の理解度(30%)、最新研究調査と研究計画の妥当性(30%)、論文評価(40%)の合計点数によって評価する。	
【テキスト】		
【参考書】		
【備考】		
【社会人聴講生】		【科目等履修生】

【科目名】	研究指導Ⅱ	Special LectureⅡ
【開講時期】	2024年度前期、2024年度後期	
【科目責任者】		
【担当教員】	内海 佐和子	
【授業の目的・方法】	<ul style="list-style-type: none"> ・指導教員の指導のもと、博士研究の研究計画を遂行する ・博士論文を構成する2本目の査読付き論文を通す ・授業は対面で行う 	
【到達目標】		
【準備学習】	最終年度を見据え、主体的、計画的に博士研究を進める	
【授業展開】	第1回:ガイダンス 第2回以降は履修者と相談のうえ、進める	
【評価方法】	博士研究の進捗状況、査読論文の採用状況などにより総合的に評価する	
【テキスト】	なし	
【参考書】	必要に応じ、講義中に適宜、紹介する	
【備考】		
【社会人聴講生】	不可	【科目等履修生】 不可

【科目名】	研究指導Ⅲ	Special Lecture III
【開講時期】	2024 年度前期、2024 年度後期	
【科目責任者】	武藤 伸明	
【担当教員】	武藤 伸明	
【授業の目的・方法】	学生が、グラフ論、組合せ論などの分野におけるコンピュータを活用した高度な研究を実施し、投稿論文および博士論文を執筆することを目的とする。	
【到達目標】	グラフ論、組合せ論などの分野における研究を推進すること。 投稿論文および博士論文を作成すること。	
【準備学習】	予習: 研究を実施し、論文の執筆内容について検討すること。 復習: 研究結果を論文に反映すること。	
【授業展開】	1-5 回目: 研究の深化 6-10 回目: 第 2 投稿論文の作成 11-15 回目: 第 2 投稿論文の投稿 16-20 回目: 博士論文の執筆 21-25 回目: 博士論文の執筆と提出 26-30 回目: 発表の準備	
【評価方法】	研究の遂行 (50%)、論文執筆 (50%) に基づいて評価する。	
【テキスト】	授業時に適宜指示する。	
【参考書】	授業時に適宜指示する。	
【備考】		
【社会人聴講生】	不可	【科目等履修生】 不可

【科目名】	研究指導Ⅲ	Special Lecture III
【開講時期】	2024 年度前期、2024 年度後期	
【科目責任者】	岸 昭雄	
【担当教員】	岸 昭雄	
【授業の目的・方法】	公共政策に関する高度な研究を行うために必要な知識やスキル、方法論を、博士後期課程の学生に身につけさせることを目的とする。 講義、ケーススタディ、ディスカッション等を通じて教授する。	
【到達目標】	公共政策に関する基礎理論と現在の動向を理解し、研究遂行能力を身につける。	
【準備学習】	学生は現代社会の現状について正しく詳細に理解し、直面している社会の問題について把握していることが要求される。	
【授業展開】	1-10 回目：研究の基礎 研究の意義、目的設定の方法、先行研究のレビュー等の方法論について議論する 11-20 回目：研究手法 データ収集、インタビュー調査等の研究手法について議論する 21-30 回目：研究のまとめ 研究成果の記述方法、発表方法について議論する	
【評価方法】	ディスカッションへの貢献度、作成した資料やプレゼンテーションから総合的に評価する	
【テキスト】	指導の中で提示する	
【参考書】	指導の中で提示する	
【備考】	特に無し	
【社会人聴講生】	不可	【科目等履修生】 不可

【科目名】	研究指導Ⅲ	Special Lecture Ⅲ
【開講時期】	2024 年度前期、2024 年度後期	
【科目責任者】	東野定律	
【担当教員】	東野定律	
【授業の目的・方法】	<p>博士課程 3 年間で博士論文を構成する論文を 2 本以上作成し、論文の審査及び試験に合格するために必要な下記の専門的知識及び能力を獲得することを目的とする。</p> <p>(1)研究テーマとなる内容に深い関わりをもちつつ、医療、介護をはじめとする研究において、自己の研究に必要な高度な専門的知識。</p> <p>(2)現代における課題を的確に発見・把握し、課題を学術的方法で解決する能力。</p> <p>方法は、先行研究のレビュー、関係データの収集・分析、論文執筆指導の受講等により行います。 授業形態は、受講者と担当教員が相談の上、決定します。</p>	
【到達目標】	博士論文を構成する個々の論文・報告書等(以下「論文等」という)を2本以上作成し、査読等を経て、学会誌等に掲載し、公表すること。	
【準備学習】	授業前に、指定する文献等を読み、又は指定する論文等を作成すること。	
【授業展開】	<p>下記内容を基本とし、進捗に応じて履修者と相談の上進めていく。</p> <p>第 1 回～第 3 回 研究スケジュール及び博士論文の全体構成案の修正 第 4 回～第 8 回 博士論文構成論文等の作成・投稿 第 9 回～第 13 回 博士論文構成論文等の作成・投稿 第 14 回～第 18 回 博士論文構成論文等の作成・投稿 第 19 回～第 21 回 博士論文全体の再検討 第 22 回～第 25 回 博士論文中間報告の準備 第 26 回～第 30 回 博士論文全体の修正</p>	
【評価方法】	進捗を含め博士論文構成論文等の内容(6割)及び報告(4割)によって評価します。	
【テキスト】	別途必要に応じて指定する。	
【参考書】	別途必要に応じて指定する。	
【備考】		
【社会人聴講生】	不可	【科目等履修生】 不可

【科目名】	研究指導Ⅲ	Special Lecture III
【開講時期】	2024 年度前期、2024 年度後期	
【科目責任者】		
【担当教員】	上原 克仁	
【授業の目的・方法】	博士論文を作成し、論文の審査及び試験に合格するために必要な専門的知識及び能力の獲得を目的とする。	
【到達目標】	博士論文を執筆し、最終審査において合格すること。	
【準備学習】	自ら積極的に研究を行い、論文の執筆や学会での報告に努めること。	
【授業展開】	<p>受講者と相談の上、決定する。おおよそは以下のとおりである。</p> <p>第 1 回～第 3 回 本年度の研究スケジュール及び博士論文の構成案の作成</p> <p>第 4 回～第 12 回 博士論文の執筆</p> <p>第 13 回～第 15 回 中間審査の準備</p> <p>第 16 回～第 18 回 中間審査を踏まえた博士論文の修正</p> <p>第 19 回～第 23 回 博士論文全体の再点検・補正</p> <p>第 24 回～第 27 回 博士論文全体の仕上げ</p> <p>第 28 回～第 30 回 最終試験及び最終審査の準備</p>	
【評価方法】	執筆した論文の質をもとに評価する。	
【テキスト】	別途指示する。	
【参考書】	別途指示する。	
【備考】	特になし。	
【社会人聴講生】	受入不可。	【科目等履修生】 受入不可。

【科目名】	研究指導Ⅲ	Special Lecture Ⅲ
【開講時期】	2024 年度前期、2024 年度後期	
【科目責任者】		
【担当教員】	*小西 敦	
【授業の目的・方法】	<p>博士論文を作成し、論文の審査及び試験に合格するために必要な下記の専門的知識及び能力を獲得することを目的とします。</p> <p>(1)政策学に深い関わりをもちつつ、経営学の要素も含む研究において、自己の専門分野に関する高度な専門的知識。</p> <p>(2)現代の地域社会における課題を的確に発見・把握し、課題を学術的方法で解決する能力。</p> <p>方法は、先行研究のレビュー、関係データの収集・分析、論文執筆等により行います。 授業形態は、受講者と担当教員が相談の上、決定します。</p>	
【到達目標】	博士論文を作成し、中間審査を経て、最終試験、最終審査において、合格を得ること。	
【準備学習】	授業前に、指定する文献等を読み、又は指定する論文や報告書を作成すること。	
【授業展開】	<p>下記の日程については、履修者と相談の上、変更があり得ます。</p> <p>第 1 回～第 3 回 研究スケジュール及び博士論文の全体構成案の作成 第 4 回～第 8 回 博士論文構成論文の補充執筆 第 9 回～第 13 回 中間審査の準備 第 14 回～第 18 回 中間審査を踏まえた博士論文の修正 第 19 回～第 21 回 博士論文全体の再点検・補正 第 22 回～第 25 回 博士論文全体の仕上げ 第 26 回～第 30 回 最終試験及び最終審査の準備</p>	
【評価方法】	博士論文の内容(7 割)及び報告(3 割)によって評価します。	
【テキスト】	授業中に指定します。	
【参考書】	授業中に指定します。	
【備考】	国や自治体で政策立案・政策評価・予算編成等に携わった担当教員の行政実務経験を授業内容に反映するように努めます。	
【社会人聴講生】	不可	【科目等履修生】 不可

【科目名】	研究指導Ⅲ	Special Lecture Ⅲ
【開講時期】	2024 年度前期、2024 年度後期	
【科目責任者】		
【担当教員】	* 六井 淳	
【授業の目的・方法】	人工知能関連研究を実施するために必要な高度な知識とスキルを身に付けることを目的とし、最新研究のサーベイ、人工知能関連の高度な知識とスキルの習得、調査・研究内容のプレゼンテーションを通じて教授する。	
【到達目標】	人工知能関連の最新研究動向を理解し、自身の研究の進捗に活かす方法を理解する	
【準備学習】	IEEE Xplorer の最新研究論文のサーベイ、及び、理論を駆使した研究実施方法の習得	
【授業展開】	1～5 回 : 基礎理論(確率統計、回帰分析、パターン認識) 6～10 回 : 応用理論(時系列分析、深層学習、強化学習) 11～15 回 : 最新研究に関するサーベイとその報告 16 回～20 回 : 新規研究計画の策定と研究の信頼性、妥当性の検討 21 回～25 回 : 研究の実施、ディスカッション、投稿論文プロセスの理解と準備 25～30 回 : 論文の執筆と研究成果の発信	
【評価方法】	理論の理解度(30%)、最新研究調査と研究計画の妥当性(30%)、論文評価(40%)の合計点数によって評価する。	
【テキスト】		
【参考書】		
【備考】		
【社会人聴講生】		【科目等履修生】

【科目名】	研究指導Ⅲ	Special Lecture Ⅲ
【開講時期】	2024 年度前期、2024 年度後期	
【科目責任者】		
【担当教員】	内海 佐和子	
【授業の目的・方法】	<ul style="list-style-type: none"> ・指導教員の指導のもと、博士論文を仕上げる ・博士論文の審査及び試験に合格するために必要な専門知識を習得する ・授業は対面で行う 	
【到達目標】	博士課程の最終試験、最終審査において合格すること	
【準備学習】	最終年度であることを自覚し、主体的、計画的に博士研究を完遂する	
【授業展開】	第 1 回:ガイダンス 第 2 回以降は履修者と相談のうえ、進める	
【評価方法】	博士論文の内容、仕上がり状況によって総合的に評価する	
【テキスト】	なし	
【参考書】	必要に応じ、講義中に適宜、紹介する	
【備考】		
【社会人聴講生】	不可	【科目等履修生】 不可

【科目名】	特殊演習Ⅱ(その2)	Special Seminar II(2)
【開講時期】	2024 年度前期	
【科目責任者】		
【担当教員】	*小西 敦	
【授業の目的・方法】	<p>本演習は博士論文作成にとって必要な研究方法の理解とテーマに関する知見の習得を目的とします。そのため、次のことを行うことによって、受講者が選んだテーマに関する研究能力を高めます。</p> <p>第1に、テーマに関する先行研究を選択し、それらの学術的貢献及び問題点を検討します。</p> <p>第2に、我が国におけるテーマに関する制度の変遷を整理し、制度の内容とその導入や変化の理由を実証的に把握します。</p> <p>第3に、我が国の中央政府及び地方政府における上記の制度の運用状況を分析し、その成果と課題を検討します。</p> <p>第4に、テーマに関する諸外国の制度を検討します。</p> <p>本演習では、原則として、各回において、事前課題についての発表を行ってまいります。</p> <p>なお、テーマは、政策評価以外の公共政策論や地方自治論上のテーマを予定しています。テーマ調整などがありますので、本演習の履修を希望する場合には、事前に担当教員に連絡してください。</p> <p>本演習の実施方法や日程も、履修者と相談の上、決定しますので、履修希望者は、上記の履修前の連絡を必ずしてください。</p>	
【到達目標】	<p>自らで研究上の問を立て、それに関する先行研究を踏まえた考察を行い、問いに対する自分なりの答えを出し、以上の過程を言語化し、博士論文を構成する論文を1本以上、書けるようになること。</p>	
【準備学習】	<p>各回に事前に指定した文献を読んで、それに対する自分の見解を、授業中に発表できる形で準備すること。授業終了後、授業中の気づき等を踏まえて、自分の見解を見直し、精緻化すること。</p>	
【授業展開】	<p>下記の日程については、履修者と相談の上、変更があり得ます。</p> <p>第1回:ガイダンス:研究テーマ及び本演習の進め方の説明</p> <p>第2回:テーマの概念:テーマに関する基本的な概念の考察</p> <p>第3回:テーマに関する先行研究の検討その1</p> <p>第4回:テーマに関する先行研究の検討その2</p> <p>第5回:テーマに関する先行研究の検討その3</p> <p>第6回:テーマに関する我が国の制度の検討その1</p> <p>第7回:テーマに関する我が国の制度の検討その2</p> <p>第8回:テーマに関する我が国の制度の検討その3</p> <p>第9回:テーマに関する我が国の制度の運用の検討その1</p> <p>第10回:テーマに関する我が国の制度の運用の検討その2</p> <p>第11回:テーマに関する我が国の制度の運用の検討その3</p> <p>第12回:テーマに関する諸外国の制度の検討その1</p> <p>第13回:テーマに関する諸外国の制度の検討その2</p> <p>第14回:テーマに関する制度の成果と課題</p> <p>第15回:まとめ</p>	
【評価方法】	授業回ごとの発表内容(4割)、最終レポートの内容(6割)。	
【テキスト】	授業中に指定します。	
【参考書】	<p>真淵勝(2020)『新版 行政学』有斐閣</p> <p>伊藤修一郎(2022)『政策リサーチ入門 増補版』東京大学出版会</p>	
【備考】	<p>学習内容に対する主体的な取り組みを期待します。</p> <p>国や自治体で政策立案・政策評価・予算編成等に携わった担当教員の行政実務経験を授業内容に反映するように努めます。</p>	
【社会人聴講生】	聴講可 (通常の履修学生と同様のレポート等による評価を受けること)	履修可 (通常の履修学生と同様のレポート等による評価を受けること)

【科目名】	特殊演習Ⅱ(その2)	Special Seminar II(2)
【開講時期】	2024 年度前期	
【科目責任者】	*松岡 清志	
【担当教員】	*松岡 清志	
【授業の目的・方法】	<p>政策科学は政治学、行政学、経済学をはじめとする学際的要素の強い学問です。それゆえ、政策分析に主眼を置く博士論文を執筆する際には、多様なアプローチの中からどれが最も適するかを比較考量することが重要です。本講義は、その前提となる視座や理論枠組みを身につけることを目的とします。</p> <p>講義の前半は、毎回1～2名を報告者として割り当て、文献の該当部分に関する報告を行い、報告者より示された疑問点やディスカッションポイントについて、受講者相互の議論および担当教員の解説を交える形で進めます。その後、前半で学んだ視座や理論枠組みをご自身の研究にどう活かすかを報告していただきます。</p>	
【到達目標】	政策分析における視座および理論枠組みを多角的に整理し、様々なアプローチを組み合わせた博士論文を執筆できるようになることを目標とします。	
【準備学習】	受講前に文献の該当箇所を読んだうえで、疑問点およびディスカッションで取り上げるテーマについて整理しておくことが求められます(運営上の観点から報告者を毎回1～2名割り当てますが、上記準備は報告者以外も同様です)。受講後には、関連する文献の参照、国内外の事例の探索を積極的に行ってください。	
【授業展開】	<p>第1回 イン트로ダクションおよび報告者の決定</p> <p>第2回 概念および研究領域としての公共政策とは何か</p> <p>第3回 政治と政策の関係</p> <p>第4回 政策に影響を及ぼす存在:アクターと制度</p> <p>第5回 政策デザイン</p> <p>第6回 政策過程(1)</p> <p>第7回 政策過程(2)</p> <p>第8回 多様な政策分析手法</p> <p>第9回 政策評価:インパクト分析とプログラム評価</p> <p>第10回 政策実施</p> <p>第11回 政策研究の新たな方向性</p> <p>第12回 政策科学の展望</p> <p>第13回 政策科学の活用(1)</p> <p>第14回 政策科学の活用(2)</p> <p>第15回 総括</p>	
【評価方法】	講義における報告と討論への参加(60%)、レポート結果(40%)から総合的に評価いたします。	
【テキスト】	受講者との協議によって決定いたしますが、現時点では、Kevin B. Smith, Christopher Larimer, "The Public Policy Theory Primer(3rd edition)", Routledge, 2017を予定しています。	
【参考書】	<p>秋吉貴雄・伊藤修一郎・北山俊哉『公共政策学の基礎(第3版)』有斐閣、2020。</p> <p>北山俊哉・稲継裕昭(編)『テキストブック地方自治(第3版)』東洋経済新報社、2021。</p> <p>西岡晋・廣川嘉裕(編)『行政学』文眞堂、2021。</p> <p>若林恵(責任編集)『NEXT GENERATION GOVERNMENT 次世代ガバメント 小さくて大きい政府のつくり方』日本経済新聞出版、2019。</p> <p>ザビーネ＝クールマン・ヘルムート＝ヴォルマン(著)、縣公一郎・久邇良子・岡本三彦・宇野二郎(訳)『比較行政学入門ーヨーロッパ行政改革の動向ー』成文堂、2021。</p> <p>その他、講義中にご紹介いたします。</p>	
【備考】	担当者は、2020年度までデジタル・ガバメントに関する研究機関に在籍し、国および地方自治体におけるデジタル技術の活用、公共サービス提供における行政と民間および個人の協働などについて研究を行うとともに、行政機関の先行事例に関する調査やガイドライン作成の支援を行った経験を有しております。本講義では、公共政策および公共サービスに関する最近の動向についても解説する予定です。	
【社会人聴講生】	可能です。但し、評価方法につきましては同一の条件となりますのでご了承ください。	【科目等履修生】 可能です。但し、評価方法につきましては同一の条件となりますのでご了承ください。

【科目名】	特殊演習Ⅱ(その3)	Special Seminar II(3)
【開講時期】	2024 年度前期	
【科目責任者】		
【担当教員】	*小西 敦	
【授業の目的・方法】	<p>本演習は博士論文作成にとって必要な研究方法の理解とテーマに関する知見の習得を目的とします。そのため、次のことを行うことによって、受講者が選んだテーマに関する研究能力を高めます。</p> <p>第1に、テーマに関する先行研究を選択し、それらの学術的貢献及び問題点を検討します。</p> <p>第2に、我が国におけるテーマに関する制度の変遷を整理し、制度の内容とその導入や変化の理由を実証的に把握します。</p> <p>第3に、我が国の中央政府及び地方政府における上記の制度の運用状況を分析し、その成果と課題を検討します。</p> <p>第4に、テーマに関する諸外国の制度を検討します。</p> <p>本演習では、原則として、各回において、事前課題についての発表を行ってまいります。</p> <p>なお、テーマは、政策評価以外の公共政策論や地方自治論上のテーマを予定しています。テーマ調整などがありますので、本演習の履修を希望する場合には、事前に担当教員に連絡してください。</p> <p>本演習の実施方法や日程も、履修者と相談の上、決定しますので、履修希望者は、上記の履修前の連絡を必ずしてください。</p>	
【到達目標】	<p>自らで研究上の問を立て、それに関する先行研究を踏まえた考察を行い、問いに対する自分なりの答えを出し、以上の過程を言語化し、博士論文を構成する論文を1本以上、書けるようになること。</p>	
【準備学習】	<p>各回に事前に指定した文献を読んで、それに対する自分の見解を、授業中に発表できる形で準備すること。授業終了後、授業中の気づき等を踏まえて、自分の見解を見直し、精緻化すること。</p>	
【授業展開】	<p>下記の日程については、履修者と相談の上、変更があり得ます。</p> <p>第1回:ガイダンス:研究テーマ及び本演習の進め方の説明</p> <p>第2回:テーマの概念:テーマに関する基本的な概念の考察</p> <p>第3回:テーマに関する先行研究の検討その1</p> <p>第4回:テーマに関する先行研究の検討その2</p> <p>第5回:テーマに関する先行研究の検討その3</p> <p>第6回:テーマに関する我が国の制度の検討その1</p> <p>第7回:テーマに関する我が国の制度の検討その2</p> <p>第8回:テーマに関する我が国の制度の検討その3</p> <p>第9回:テーマに関する我が国の制度の運用の検討その1</p> <p>第10回:テーマに関する我が国の制度の運用の検討その2</p> <p>第11回:テーマに関する我が国の制度の運用の検討その3</p> <p>第12回:テーマに関する諸外国の制度の検討その1</p> <p>第13回:テーマに関する諸外国の制度の検討その2</p> <p>第14回:テーマに関する制度の成果と課題</p> <p>第15回:まとめ</p>	
【評価方法】	授業回ごとの発表内容(4割)、最終レポートの内容(6割)。	
【テキスト】	授業中に指定します。	
【参考書】	<p>真淵勝(2020)『新版 行政学』有斐閣</p> <p>伊藤修一郎(2022)『政策リサーチ入門 増補版』東京大学出版会</p>	
【備考】	<p>学習内容に対する主体的な取り組みを期待します。</p> <p>国や自治体で政策立案・政策評価・予算編成等に携わった担当教員の行政実務経験を授業内容に反映するように努めます。</p>	
【社会人聴講生】	聴講可 (通常の履修学生と同様のレポート等による評価を受けること)	履修可 (通常の履修学生と同様のレポート等による評価を受けること)

【科目名】	特殊演習Ⅱ(その3)	Special Seminar II(3)
【開講時期】	2024 年度前期	
【科目責任者】	*松岡 清志	
【担当教員】	*松岡 清志	
【授業の目的・方法】	<p>政策科学は政治学、行政学、経済学をはじめとする学際的要素の強い学問です。それゆえ、政策分析に主眼を置く博士論文を執筆する際には、多様なアプローチの中からどれが最も適するかを比較考量することが重要です。本講義は、その前提となる視座や理論枠組みを身につけることを目的とします。</p> <p>講義の前半は、毎回1～2名を報告者として割り当て、文献の該当部分に関する報告を行い、報告者より示された疑問点やディスカッションポイントについて、受講者相互の議論および担当教員の解説を交える形で進めます。その後、前半で学んだ視座や理論枠組みをご自身の研究にどう活かすかを報告していただきます。</p>	
【到達目標】	政策分析における視座および理論枠組みを多角的に整理し、様々なアプローチを組み合わせた博士論文を執筆できるようになることを目標とします。	
【準備学習】	受講前に文献の該当箇所を読んだうえで、疑問点およびディスカッションで取り上げるテーマについて整理しておくことが求められます(運営上の観点から報告者を毎回1～2名割り当てますが、上記準備は報告者以外も同様です)。受講後には、関連する文献の参照、国内外の事例の探索を積極的に行ってください。	
【授業展開】	<p>第1回 イン트로ダクションおよび報告者の決定</p> <p>第2回 概念および研究領域としての公共政策とは何か</p> <p>第3回 政治と政策の関係</p> <p>第4回 政策に影響を及ぼす存在:アクターと制度</p> <p>第5回 政策デザイン</p> <p>第6回 政策過程(1)</p> <p>第7回 政策過程(2)</p> <p>第8回 多様な政策分析手法</p> <p>第9回 政策評価:インパクト分析とプログラム評価</p> <p>第10回 政策実施</p> <p>第11回 政策研究の新たな方向性</p> <p>第12回 政策科学の展望</p> <p>第13回 政策科学の活用(1)</p> <p>第14回 政策科学の活用(2)</p> <p>第15回 総括</p>	
【評価方法】	講義における報告と討論への参加(60%)、レポート結果(40%)から総合的に評価いたします。	
【テキスト】	受講者との協議によって決定いたしますが、現時点では、Kevin B. Smith, Christopher Larimer, "The Public Policy Theory Primer(3rd edition)", Routledge, 2017を予定しています。	
【参考書】	<p>秋吉貴雄・伊藤修一郎・北山俊哉『公共政策学の基礎(第3版)』有斐閣、2020。</p> <p>北山俊哉・稲継裕昭(編)『テキストブック地方自治(第3版)』東洋経済新報社、2021。</p> <p>西岡晋・廣川嘉裕(編)『行政学』文眞堂、2021。</p> <p>若林恵(責任編集)『NEXT GENERATION GOVERNMENT 次世代ガバメント 小さくて大きい政府のつくり方』日本経済新聞出版、2019。</p> <p>ザビーネ＝クールマン・ヘルムート＝ヴォルマン(著)、縣公一郎・久邇良子・岡本三彦・宇野二郎(訳)『比較行政学入門ーヨーロッパ行政改革の動向ー』成文堂、2021。</p> <p>その他、講義中にご紹介いたします。</p>	
【備考】	担当者は、2020年度までデジタル・ガバメントに関する研究機関に在籍し、国および地方自治体におけるデジタル技術の活用、公共サービス提供における行政と民間および個人の協働などについて研究を行うとともに、行政機関の先行事例に関する調査やガイドライン作成の支援を行った経験を有しております。本講義では、公共政策および公共サービスに関する最近の動向についても解説する予定です。	
【社会人聴講生】	可能です。但し、評価方法につきましては同一の条件となりますのでご了承ください。	【科目等履修生】
		可能です。但し、評価方法につきましては同一の条件となりますのでご了承ください。

【科目名】	特殊演習Ⅱ(その4)	Special Seminar II(4)	
【開講時期】	2024 年度前期		
【科目責任者】			
【担当教員】	*小西 敦		
【授業の目的・方法】	<p>本演習は博士論文作成にとって必要な研究方法の理解とテーマに関する知見の習得を目的とします。そのため、次のことを行うことによって、受講者が選んだテーマに関する研究能力を高めます。</p> <p>第1に、テーマに関する先行研究を選択し、それらの学術的貢献及び問題点を検討します。</p> <p>第2に、我が国におけるテーマに関する制度の変遷を整理し、制度の内容とその導入や変化の理由を実証的に把握します。</p> <p>第3に、我が国の中央政府及び地方政府における上記の制度の運用状況を分析し、その成果と課題を検討します。</p> <p>第4に、テーマに関する諸外国の制度を検討します。</p> <p>本演習では、原則として、各回において、事前課題についての発表を行ってまいります。</p> <p>なお、テーマは、政策評価以外の公共政策論や地方自治論上のテーマを予定しています。テーマ調整などがありますので、本演習の履修を希望する場合には、事前に担当教員に連絡してください。</p> <p>本演習の実施方法や日程も、履修者と相談の上、決定しますので、履修希望者は、上記の履修前の連絡を必ずしてください。</p>		
【到達目標】	<p>自らで研究上の問を立て、それに関する先行研究を踏まえた考察を行い、問いに対する自分なりの答えを出し、以上の過程を言語化し、博士論文を構成する論文を1本以上、書けるようになること。</p>		
【準備学習】	<p>各回に事前に指定した文献を読んで、それに対する自分の見解を、授業中に発表できる形で準備すること。授業終了後、授業中の気づき等を踏まえて、自分の見解を見直し、精緻化すること。</p>		
【授業展開】	<p>下記の日程については、履修者と相談の上、変更があり得ます。</p> <p>第1回:ガイダンス:研究テーマ及び本演習の進め方の説明</p> <p>第2回:テーマの概念:テーマに関する基本的な概念の考察</p> <p>第3回:テーマに関する先行研究の検討その1</p> <p>第4回:テーマに関する先行研究の検討その2</p> <p>第5回:テーマに関する先行研究の検討その3</p> <p>第6回:テーマに関する我が国の制度の検討その1</p> <p>第7回:テーマに関する我が国の制度の検討その2</p> <p>第8回:テーマに関する我が国の制度の検討その3</p> <p>第9回:テーマに関する我が国の制度の運用の検討その1</p> <p>第10回:テーマに関する我が国の制度の運用の検討その2</p> <p>第11回:テーマに関する我が国の制度の運用の検討その3</p> <p>第12回:テーマに関する諸外国の制度の検討その1</p> <p>第13回:テーマに関する諸外国の制度の検討その2</p> <p>第14回:テーマに関する制度の成果と課題</p> <p>第15回:まとめ</p>		
【評価方法】	授業回ごとの発表内容(4割)、最終レポートの内容(6割)。		
【テキスト】	授業中に指定します。		
【参考書】	<p>真淵勝(2020)『新版 行政学』有斐閣</p> <p>伊藤修一郎(2022)『政策リサーチ入門 増補版』東京大学出版会</p>		
【備考】	<p>学習内容に対する主体的な取り組みを期待します。</p> <p>国や自治体で政策立案・政策評価・予算編成等に携わった担当教員の行政実務経験を授業内容に反映するように努めます。</p>		
【社会人聴講生】	聴講可 (通常の履修学生と同様のレポート等による評価を受けること)	【科目等履修生】	履修可 (通常の履修学生と同様のレポート等による評価を受けること)

【科目名】	特殊演習Ⅱ(その4)	Special Seminar II(4)
【開講時期】	2024 年度前期	
【科目責任者】	*松岡 清志	
【担当教員】	*松岡 清志	
【授業の目的・方法】	<p>政策科学は政治学、行政学、経済学をはじめとする学際的要素の強い学問です。それゆえ、政策分析に主眼を置く博士論文を執筆する際には、多様なアプローチの中からどれが最も適するかを比較考量することが重要です。本講義は、その前提となる視座や理論枠組みを身につけることを目的とします。</p> <p>講義の前半は、毎回1～2名を報告者として割り当て、文献の該当部分に関する報告を行い、報告者より示された疑問点やディスカッションポイントについて、受講者相互の議論および担当教員の解説を交える形で進めます。その後、前半で学んだ視座や理論枠組みをご自身の研究にどう活かすかを報告していただきます。</p>	
【到達目標】	政策分析における視座および理論枠組みを多角的に整理し、様々なアプローチを組み合わせた博士論文を執筆できるようになることを目標とします。	
【準備学習】	受講前に文献の該当箇所を読んだうえで、疑問点およびディスカッションで取り上げるテーマについて整理しておくことが求められます(運営上の観点から報告者を毎回1～2名割り当てますが、上記準備は報告者以外も同様です)。受講後には、関連する文献の参照、国内外の事例の探索を積極的に行ってください。	
【授業展開】	<p>第1回 イン트로ダクションおよび報告者の決定</p> <p>第2回 概念および研究領域としての公共政策とは何か</p> <p>第3回 政治と政策の関係</p> <p>第4回 政策に影響を及ぼす存在:アクターと制度</p> <p>第5回 政策デザイン</p> <p>第6回 政策過程(1)</p> <p>第7回 政策過程(2)</p> <p>第8回 多様な政策分析手法</p> <p>第9回 政策評価:インパクト分析とプログラム評価</p> <p>第10回 政策実施</p> <p>第11回 政策研究の新たな方向性</p> <p>第12回 政策科学の展望</p> <p>第13回 政策科学の活用(1)</p> <p>第14回 政策科学の活用(2)</p> <p>第15回 総括</p>	
【評価方法】	講義における報告と討論への参加(60%)、レポート結果(40%)から総合的に評価いたします。	
【テキスト】	受講者との協議によって決定いたしますが、現時点では、Kevin B. Smith, Christopher Larimer, "The Public Policy Theory Primer(3rd edition)", Routledge, 2017を予定しています。	
【参考書】	<p>秋吉貴雄・伊藤修一郎・北山俊哉『公共政策学の基礎(第3版)』有斐閣、2020。</p> <p>北山俊哉・稲継裕昭(編)『テキストブック地方自治(第3版)』東洋経済新報社、2021。</p> <p>西岡晋・廣川嘉裕(編)『行政学』文眞堂、2021。</p> <p>若林恵(責任編集)『NEXT GENERATION GOVERNMENT 次世代ガバメント 小さくて大きい政府のつくり方』日本経済新聞出版、2019。</p> <p>ザビーネ＝クールマン・ヘルムート＝ヴォルマン(著)、縣公一郎・久邇良子・岡本三彦・宇野二郎(訳)『比較行政学入門ーヨーロッパ行政改革の動向ー』成文堂、2021。</p> <p>その他、講義中にご紹介いたします。</p>	
【備考】	担当者は、2020 年度までデジタル・ガバメントに関する研究機関に在籍し、国および地方自治体におけるデジタル技術の活用、公共サービス提供における行政と民間および個人の協働などについて研究を行うとともに、行政機関の先行事例に関する調査やガイドライン作成の支援を行った経験を有しております。本講義では、公共政策および公共サービスに関する最近の動向についても解説する予定です。	
【社会人聴講生】	可能です。但し、評価方法につきましては同一の条件となりますのでご了承ください。	【科目等履修生】 可能です。但し、評価方法につきましては同一の条件となりますのでご了承ください。